文部省検閲済
第一回特選映画
明治座

明治座の十二月は

大阪 文樂座人形淨瑠璃芝居

一座全部引越大興行

當る十一月廿七日より十七日間（五回替り）

第一回狂言（十一月廿七日より三十日迄四日間）

彦山權現誓助討
瓢箪棚の段
毛谷村六助住家の段

艶容女舞衣
酒屋の段

妹脊山婦女庭訓
背山の段
妹山の段

東海道膝栗毛
赤坂並木より古寺の段

昭和六年十一月廿七日初日

◇毎日三時開演

御入場料

◎一等（御一名）金四圓
◎二等（御一名）金二圓八十錢
◎三等（御一名）金一圓八十錢
◎三階（御一名）金八十錢

前賣券御利用願上候

觀劇會か諸積の御會合に御利用願ます。御申込次第係員參上總て御便宜に御計らひ申上げます。

前賣用電話濱話 三八九
團體用電話濱花（自五九九〇 至五九九四）

濱町 金座 明治座

太夫・三味線連名

竹本相益太夫
竹本越名太夫
竹本土佐子太夫
鶴澤綱治
豐竹好太夫
野澤市松
豐竹宮太夫
豐澤仙三郎
竹本佐久太夫
野澤吉男
竹本津摩太夫
鶴澤清若
竹本可美太夫
野澤吉貞
竹本播路太夫
豐澤團伊三
竹本文太夫
鶴澤綱右衞門

竹本南部太夫
野澤吉彌
竹本鏡太夫
豐澤廣助
豐竹つばめ太夫
豐澤仙糸
竹本相生太夫
鶴澤清二郎
竹本錣太夫
豐澤新左衞門
豐竹古靱太夫
鶴澤清六
竹本土佐太夫
野澤吉兵衞
竹本津太夫
鶴澤綱造

人形遣連名

吉田榮三
吉田文五郎
吉田玉次郎
吉田玉七
桐竹政龜
吉田玉松
吉田小兵吉
桐竹紋十郎
吉田玉幸
吉田扇太郎
桐竹門造
桐竹紋太郎
吉田玉德
吉田傳之助
吉田瓢壽呂
吉田文作
吉田玉市
吉田光之助

吉田兵次
吉田寛三郎
吉田萬次郎
吉田玉未
吉田文之助
吉田市松
吉田利男
吉田榮三郎
桐竹紋司
吉田文二郎
吉田玉吉
吉田榮之助
吉田玉昇
吉田文枝
吉田玉丸
桐竹紋彌
小川彌三郎

文樂人形淨瑠璃擁護會規約

第一條　本會は文樂座人形淨瑠璃擁護會と稱す

第二條　本會は文樂座人形淨瑠璃及斯道を擁護するを目的とす

第三條　本會の趣意を贊成するものを以て會員とす

第四條　本會の趣意に贊成し金壹百圓以上を寄附したるものを特別會員とす

第五條　本會に左の役員を置く

會長　一名　副會長　一名

理事　十名　評議員　若干名

第六條　評議員は總會に於て選擧し會長副會長及理事は評議員會に於て選擧す

第七條　役員の任期は三ヶ年とす

第八條　本會の經費は會費及寄附金を以て之に充つ

第九條　本會の會費は年額金六圓とす

第十條　本會は右會費六圓の中にて年一回理事會に於て定めたる日程の觀覽券一枚を配付するものとす

第十一條　總會は一ヶ年に一回開會す

但し理事會に於て必要と認むる場合は臨時會を開く事あるべし

文樂人形淨瑠璃擁護會理事

伊原青々園　安部豐
石川木舟　佐藤義亮
近松秋江　結城禮一郎
和田英作　三宅周太郎
山崎紫紅

（イロハ順）

事務所

東京市小石川區原町三十一

文樂人形淨瑠璃擁護會

振替口座東京四九八一一番

觀劇おぼえ

昭和六年十一月　日

産山檀現暫助劔について	
妹背山婦女庭訓について	
艶容女舞衣について	

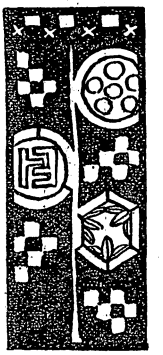
東海道膝栗毛について	

備考

お客様方へ
特に御願ひ

◇お場席へ御携帯品をお置きのまゝお立ちになりますと紛失の恐れがあり御座いますから、何卒お持ちになるか或は御預け所へお預り致しお願ひ致します。

◇お履物はなるべくお靴かお草履が御便利です。下足預り所が混雑致しますので。



人形淨瑠璃について

黑衣子

文樂といへば人形淨瑠璃、人形淨瑠璃と云へば文樂、と斯うした現今の實情は、と云ひますのが、御案内の義太夫淨瑠璃としては、必ずしも衰へたらず却々盛んなもある現狀といたして、少しく淋し過ぎはしますまいか？　と申しますのが、人形淨瑠璃は文樂一座きりなのです。珍重せざるを得ないでは有ませんか？　今にして切に大方の御後援を期したき所以であります。當然保護さるべき藝術日本國の傳統的古典藝術の一つだなど、、事々しく今更論らふまでもあるまいかと考へます。

申すまでも無く、淨瑠璃と三味線と、そして人形の三位一體が人形淨瑠璃です。一つも缺くべきでは有りません。三者の合して一體となる渾然、全く呼吸一つ、間一つで、卽くかと思へば離れ離れるかと見れば卽く、其境や妙絕であります。歷史の果實、歷代名人琢磨の賜物です。

三者の關係の緊密なる、例の「千本櫻」の鮨屋、梶原と權太の件りで梶原が「コリヤ權太」といふ所で、何うしても三味線の手に間が開く、それを何うするか？「何ぢや」と返辭するのが權太を遣つてゐる人形遣ひ、物言ふべからざる人形の遣手が之をいふので、何うしても然うしなければ成らないのだといふ　理外の理？　誠に面白い事實で、そして如何に其間の至難しいものなるかの之は一例だと云ふので有ります。

更に此人形遣ひ、あの三人遣ひに就いて見ますと、先づ主たる遣ひ手が左手を人形の背中から胴に差し込んで人形の位置を定め、同時に右手を以て人形の右手を動かして居り、別に左遣ひといふのが人形の左手をつかひ、又別の足遣ひと云ふのが人形の足だけを遣つて

居るのださうで、玆でも亦三位一體、別々の三ツの頭腦から出る三ツの神經が、それこそ凝つて一個の人形の、固より一つの魂と成らなければならないので、それには三人共に其人形の頭を賴るのださうで、即ち第一の遣手は背中から左遣ひは左から、又足遣ひは下の方から、と總ては神經を其頭に集める。そして更に足遣ひの左腕は人形遣手の腰に接觸してゐて其處に神經の傳達がある、といふのが其腰の動きに付れて人形の足を動かすので、他方左遣ひは絶へず其人形の眼の行く方へと心を付ける。と云つた樣な具合なものださうで、その至難しさは推して知るべきで有ります。

斯くて人形は生きます。生きて浮世の義理と人情とに泣き、そこに妖しの妙なる小さな世界を作るのです。

さて然らば人形の種類は、といひますと、「文七」といふ頭があつて之は光秀、五右衞門、貞任、熊谷などに用ひられ、「孔明」と云ふのは由良之助、菅丞相などに成り「團七」と呼ぶ頭は宗任や權太また「源太」は重次郎、三浦之助八幡太郎、義經などの役に用ひられ、殊に後者は眉が動くので動きの權太とも云はれるのださうであります、と違つて前に云へる「孔明」は眼は眠りますが眉は動かず所謂ベラボウ眉毛といふ描眉毛でありますとか。それから勝賴や忠兵衞に成るのが「若男」で師直、梶原（鮨屋の）、太郎左衞門（大塔宮）などの役をするのが丸目のしゆと（舅？）」。續いて「ふけをやま」は操、相模、千代等の役を、又「娘」は八重、初菊、時姫、しのぶ等の役を、又「新造」は阿古屋、夕霧、宮城野、梅ヶ枝等のおやま傾城の役を受持つのださうです。次に「婆々」は頭は同じものを其あたま（かつら）だけ取替へて夫々の役に用ひるのださうで、唯別に帶屋、一つ家等に出る怖ろしい婆々に限つて特に眼が丸くできて居りますものとか、即ち三種に

成る譯であります。それで同じ「源太」の頭でも重次郎が手負に成る前と後とでは異つたものを用ふ、と云ふ譯で、この一役でも數種の「源太」の頭を必要するのださうです。（春陽堂發行石割松太郎氏著人形芝居雜話に據る。）

それはさて措き、前にも云ふ現今では人形淨瑠璃の別名のやうに成つてゐる此文樂座の發祥は、と申しますと今を距る百餘年の昔、大阪は高津區に櫓を起した所にあり、爾來幾變遷、或ひは別に彥六座を生じた事等もありますが、例の御靈から極最近現在の四つ橋に至ります迄、唯一の傳統に　を吐いて來て居るのであります。そして其開始者は實に淡路國の人植村文樂其人だつたので有ります。

そも〳〵此淡路國と申しますのが人形淨瑠璃の盛んな土地で、衰へたりと雖も今尙其幾座かを殘して　時に貴賤を娛ませて居ります實狀は、彼の谷崎氏の小說「蓼喰ふ蟲」にも見るがやうに面白く描寫されて居ります　然り　人形淨瑠璃は此鳴門を起えた千鳥鳴く淡路國の鄕土藝術とも云ふべきで有ります。世俗に傀儡舞し、卽ち人形舞しの祖と云はれて居ります例の攝州は西の宮の百太夫か、傀儡を舞しつゝ諸國を廻つて、後殁つたのが實にこの淡路國で、そこに後を襲ふものがあつて此道がまこと旺んに成つたと傳へられて居るのでありますが、果してそれは何時頃の事であつたでせうか？

約一千年前の古書「和名抄」に傀儡の文字は既にあり、續いて匡房の「傀儡子記」には傀儡子の輪廓を傳へて男は狩を表業に、木偶や土偶を舞した遊牧の民だと云ふて居るのであります。之等の記錄から推して前いふ百太夫の後が淡路に榮えたなどの說話も其大凡の時代など〵共に大分受入れられやうかとも思ひます。何れにせよ平安朝以來長い傳統の此傀儡舞しは、遙かの後に渡來した三味線が多分加はり、又粗末ながらも淨瑠璃といふものが出來て、そ

こで京都の目貫屋長三郎が西の宮から人形遣ひを誘ひ出して、畏くも時の御陽成帝の叡覽に供した。と傳へられますが、即ち彼の慶長頃、德川の初め頃の事であります。そして面白い事は其人形遣ひが西の宮の人間で、その受領して據號を淡路といふ事であります。

即ち此西の宮が又百太夫以來淡路と共に人形舞しに、關係の深い土地に成つて居ります事は、尙江戸人形淨瑠璃の初めなる薩摩淨雲の人形遣ひが淡路の人間であり、其他「傀儡師は人形まはしの事なり、でくゞつといふ、淡路島といふ所より毎年正月にきたりしよし（訓蒙圖彙大成）」等あると共に、「百太夫の祠は――西の宮傀儡師の始祖なり（雍燈錄）」とか或ひは「寛延、寶曆の頃まで西の宮より傀儡師來りしに今は絶えて見ず當時首かけ芝居など其類なるべしとあり（樂屋圖繪拾遺）」とかあるにも知られる譯であります。

閑話休題、前述慶長中忽ちにして京にては四條五條、或は江戸の葺屋町とかに櫓が立つて、人形淨瑠璃は一勢に盛つたもので、從つて其人形なども先ず石井飛彈の人形をはじめ竹田のからくり人形、野呂松ののろま人形、次郎三郎のおやま人形、といふ具合に漸次發達して、愈々元祿時代に成ると大阪へ例の竹本義太夫が現れて竹本座をはじめ、同時に近松翁が出て其流派の爲に、人形淨瑠璃に最も適切な名淨瑠璃を澤山書卸し又人形遣ひも辰松八郎兵衞といふ名人が出て評判を採つたのであります。そこへ他方豐竹座の出來るあり、結局西と東と大阪では太夫、三味線、作者、人形遣ひと競爭的に繁昌を來し、從つて其進歩にも頗る眼覺ましいものが有つたのであります。即ち道具立から人形衣裳總て美々しく、舞臺の工夫から又人形遣ひの出遣ひについて今は太夫の出語りやら、例へば人形その物にしましてからが先づ眼が動き、指先が動き、享保の末には竹本座の與勘平、彌勘平が其腹を

ふくらますと云つた譯、現在の三人遣ひも實に此時に始まるといふ話であります。即ち今日吉田姓を名乘る人形遣ひの元祖に當る吉田文三郎其人で、既に享保のはじめに夙く同じ竹本座に於いて、「國姓爺後日合戰」の初出勤に、錦舍の出遣ひに片手の晴業を示したといふ名人であります。つゞいて元文の豐竹座「武烈天皇鱶」の佐手彦の眉が動くとか、人形の進歩に伴れて舞臺の工夫なども盛んを極め　從つて歌舞伎にさかんに眞似られると云つた譯、一例すれば彼の「夏祭」の人形に初めて帷子の衣裳を着せたとか或ひは其時遣つた一寸女房おたつに桔梗の帷子黑繻子の前帶淺黃の綿帽子を着けさせたとかの如き、今も尙歌舞伎の眞似てゐる所、事實此時代には歌舞伎はすつかり人形に押されて居たので有ります。

江戸とても之と同じく、慶長の昔各派の人形淨瑠璃が繁昌して居たりしを、一旦大阪の義太夫に依る人形淨瑠璃が入いつて來てからと云ふものは、又漸次其勢力範圍と成りおはり、歌舞伎は矢張之を眞似ると云つた有樣だつたと申します。

事實歌舞伎と此人形淨瑠璃と、互みに眞似をし影響し合ひ、其發達に見て不可分離、一にして二、二にして一と云つた程の緊密さを持つて來て居るので有ります。

そして之等人形淨瑠璃の全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以後に成ると漸次本場大阪でも、亦江戸の方でも其勢力は今度は歌舞伎の方に奪はれて、結局あの大阪は新興北堀江座さへも大した事には成らなかつたと見るべきであります。然し此間にあつても人形は其一箇に所謂黑坊四五人も掛かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、其他引拔、早替などのケレン早業は愈々進歩を見せたのでありますが、人形淨瑠璃としては其後は盛んならぬ各座の起伏消長といふ事に成つて居り、遂に前いふ文樂座のみとは成つたといふ次第であります

彦山權現誓助劔

飄箪棚の段

竹本　相生太夫
鶴澤清二郎

人形

娘　お園　桐竹政十郎
若黨　佐五平　吉田傳之助
侍　吉田扇太郎
いたち川　吉田玉徳
藤傳五右衛門　桐竹門造
馬丁　吉田兵次
奴　友平　吉田玉幸
京極内匠　吉田玉松

彦山權現誓助劔は天明六年十月、大阪道頓堀竹本千太郎座で、上場したもので、作者は梅野下風、近松保藏の二人であります。大體の筋を云ふと郡司成（毛利元就）の家臣京極内匠（後晉成）が、劔術の意恨と戀の意趣とに依つて、同藩の吉岡一味齋と云ふ老人を殺して出奔します。それを一味齋の二人の娘が敵討に出て妹は返討にされ、姉のお園は豐前國彦山の山麓で、許嫁の毛谷村六助に逢ひ、その助太刀で首尾よく本望を達すると云ふのであるが、木曾官の幻術、蛙丸の名劔千鳥の香爐等の奇瑞を取入れて、全部で十一段となつてゐます。原本は鎭西御軍記と云ふ寫本に依つて脚色されましたものださうで、宮本武藏の復讐に當嵌めたものださうで、卽ち武藏の幼名七之助をかへて六助、武藏の父を無二齋と呼ぶことから二なきは一味なるよしを以て一味齋、宮本の同姓吉岡氏とし、武藏の仇佐々木巖柳を、佐々木京極は同姓なることから、京極内匠として、武藏が父の仇を報じたことから、六助が舅一味齋の讐を討つたことに作つたものと傳へられてゐます。詰り彦山仇討として傳へられてゐます毛谷村六助の物語を當嵌ましたので、此度上演の飄箪棚の件は第七段で、六助内は第九段となつてゐまして、歌舞伎に上演されて殘つてゐるものであります。

毛谷村六助住家の段

中竹本文太夫
鶴澤綱右衛門
切竹本錣太夫
豐澤新左衛門

人形

毛谷村六助　吉田榮三

◇床本

〽道へと引返す、薄を分る秋風が吹き送りたる乘物は、急くとせねどおのづから、栗栖野にこそ着けり。ハテ只今途中ながら申し上げたる通り、夜發共は殘らず拂ひ置きましたと、引戸明ければ立出る、容義器量も吉岡が、娘と誰か夕けわひ、作りやつして辻君と見せばや見せん其風情、今宵も是に通夜すれば、明方に迎ひの乘物そち達は旅宿へ歸れ、早ふ〳〵と追かへし、邊り見廻し獨言、旅宿近邊の人目を憚り　毎夜妥迄乘物にて忍び出で、往來の人をためし見るも今宵で五夜さ、それぞと思ふ者にも出合はねば、神佛のお惠みのないのかと、思へば悲しい身の上、一味齊が娘ともいはる〻者が此樣な、夜發立ち君の姿にやつし、苦勞心苦をする事も、皆京極めが所爲故、憎しと思ふ念力に尋ね逢いて置ふかと、男增りの其魂一腰隱し置露の草のしげみに立盡す。絹物ながらしみづきて、一重に薄き青侍　通りかゝるを走り寄り、遊んでおくれと袖口に手を差込めどおめぬ體、鼻に扇のいやみして、ハヽア月前の惣州面白いなあ、併し嚢中に四文錢が三銅、是を遣はしだゞせんの、二文の釣にかゝろより我住宿へ歸ろやれ、コレそもじはそこにいつ迄も　稲荷

京極内匠　吉田玉松
門弟門八　吉田文之助
門弟曾平次　吉田文二郎
柚藤吉　吉田瓢壽呂
柚京助　吉田覺三郎
一子彌之松　吉田榮之助
娘お園　桐竹紋十郎
母お幸　吉田玉七
柚斧右衞門　吉田玉市

の惣嫁じや有まいかと、まつ毛ぬらして行過る。大道一ぱい大股にすれぬ太股すれた顔、取出相撲が歩み、寄り、菊野よ、小せんよ、又今宵もおらぬはい、ホヽヲゐらいな〳〵〳〵姉さん、一番もんでくれぬかい、いかなお敵でもな、アコリヤ取差たらなアと寄りかけしが、我より拔群大女房、見るよりしよげるあまへ聲、伯母様地取見にごんや、だんないわいの、どいつでも留おつたが最後、此いたち川が聞んのじや、エヽコレおれが力が見せたいと、嘘は見へすく褌で、伊達こきちらしいたち川、尻こそばふも逃歸る。又の往來を松蟲もすだく鈴蟲轡の音、八條流の乘振に、立派を見する西國武士、進ませ手網行駒の、道をさへぎり、申し〳〵遊んでおくれと掛鞍に手をかくれば、ヤイコリヤ〳〵御用先を妨る不敵の女め、留る者に事をかき、馬を留るとは、よつ程な助兵衞なやつ、そこ放せ下りおらふ、イヤコリヤ〳〵家來共暫く樣子有る女と見ゆる、明しを持てと提灯の、火影にとつくと其人柄、見上、見落し、打默頭き、コリヤそち達は行先の出口に控へ待合せよ、早や行け〳〵と、家來を拂ひ、實さま絶て久しき對面といひ、殊更夜陰の事なれ共中々見違へは致さぬ。そこ元は藝州吉岡氏の御息女でござらふがの、エヽイヤ左樣

の者ではござりませぬ、イヤ〳〵隱し召るるなと、馬の三途へ膝折かゞめ、拙者事は立浪家の執權轟傳五右衞門と申す者、一味齋殿の御高名をしたひ、お國へ推參致せしは早十七ケ年以前、其時そこもとは、御幼少の折なればよも見覺へは致されまい、御親父には數度御對顏致し、劍術奧義の端々をも承り得たる事なれば、外ならず門人同然の傳五右衞門、是迄も書通を以て音信絶ず、然る所一味齋殿不慮の横死と聞しより、エヽ死なしたり殘念や、直樣馳付け諸共に、敵の詮義と存じたれど、仕官の身なれは詮方なく、明暮無念に思ひしが、不思議にも今其息女に巡り逢ふ事、吉岡殿を再び見申す心地して落涙致す。去ながら心得ぬ其有樣は、エヽ聞えた、コリヤ敵をねらはん其爲に、姿をやつせし辻君なるか、ハテサテたくましきお志、女ながらも天晴家柄、いか樣親父の胤なるぞや、ホヽヲ出かされた娘もしと感じ入たる面色に人の心の花見へし、園ぞと名乘り手をつけば、傳五右衞門は懷中より燒印の札取出し、敵の有所分明ならずば、六十餘州の端々迄も、探し尋ぬる所存ならんが、今九州は新關有て、うかつに通行成りがたし、それこそ關所の往來札、惠むは夜發へ今宵の花代、エヽ忝いお志、本望とゆて此お禮は、ヲヽ目出たふ承はらん、おさらば、さらばと默禮し、誠の心筑紫人馬を早めて急ぎ行く。便りなき身は世の人の情の詞力草、伏拜みてぞ泣涙。かゝる折からいきせき來かゝる、奴もまつ黑な紺のだいなしわからぬ闇、どつと躓き後當り、是はしたりめつさに心のせきまする者だから、でつかちない麁相致したまつぴら〳〵、次手にお尋ね申さふは、此所の鎭守とやらに、女中一人通夜なされてござるのを、御存じは有るまいかなムヽそふいやるは友平ではないかいの、エ、そふおつしやるはお園樣でござりますか、是はしたり、ヤレ〳〵嬉しや〳〵、何か仰置か

れましたる御旅宿へ、漸く着仕つたる所、是に御座なさるゝと聞やいな、イヤもしらない道を闇曇に尋ねましてござります、ヲヽ、大義々々、長い道中といひ女子供の初旅なれば、さぞかしそなたのいかい苦勞、よふ介抱してたもつたのふ、そうしてアノ妹や彌三松は、旅宿に休んで居やるかや、成程ぼん様は御旅宿で佐五平にきつと預け置きましたが、隨分御機嫌は能ございます、ヲヽそれで安堵仕ました、いやもふ案じられたは妹が事、虚性な上に持病の癪もしや道で發りはせなんだか、達者で有つたか無事かと、かきたくる程尋ねられ、答へん詞、荒涙、膝に淵なす計りなり。ムヽ差うつむいて涙の體は合點が行ぬ氣遣はしい、エヽどふやら胸がさはがれて心元ない、様子を早ふ聞してくれ、なせ返事せぬ、コリヤ友平何とじやどふじやとせつかけられ、エヽ無念な口惜ふござりますはいのふ、ナニ口惜い無念なとは、サア申ーけるも面目ない事だが、お妹様お菊様は人手にかゝつてあへない御最期、ヤア、と仰天氣は半亂、餘りの事に涙も出す、むしやぶり付て引しなくり、エヽ何の事しやぞやい、誠かいやいゝ、ヲヽお道理だゝわいの、サア何者の所爲、敵は何やつ早ふいへ、こりやどふせうぞいやいゝ、ヲヽお道理だゝゝ、道理でござりますわいのふ、サコリヤ何所での事じや、サレバ須磨の邊までお供は致しましたが、旅勞れにや御持病發り、うろたへ廻つて私めは、駕籠借るべいと後の宿へ引返し、又立戻る途中にて、あやしき曲者下郎を目がけ切りかけしを、拔合せ二打三打、合す間もなく逃行しを追かくる脚元に痛はしやお菊様、明所もなしに數ケ所の深手、呼たけつても返らぬお命、まだ天道のおひかへか、和子様にはお怪我もなければ悲しい中にも心を勵まし此曲者めは必定敵、追付て捕へんと思へど遙か時も過ぎ、方角しれねば詮方も、なくゝ御骸取納

め、御筐にもと切取りし、此黒髪を妹様と思し召れて下さりませ、御歎きもお腹立も御尤だ　御尤でござりますはいの〳〵、いしこらしくお供を仕ながら、此様な事に逢はせましたは、手を出してせぬ計り、やつぱりおらが殺しましたも同じ事主殺しだわいの〳〵、ずた〳〵になされたとてお恨みないサア突つしやりませ　切刻んで下されよと、首差付ければ泣目を拂ひ、コリヤ身の言譯をするには及ばぬ、少しなり共手が〻りに、成るべき事をなぜいはぬ、うろたへたか友平と、いはれてそれよと取出だす、守り袋を手に取つて、此中にはいか様な物が有るぞ、サア臍の緒がごはります。シテ書付は永祿九年五月十日の誕生と計ごはりますが、手が〻りは成りますまいかな、稚名さへも記してない書付、あんまりばつとした物じやがスリヤ手が〻りには成りませぬかホイはつとばかりにどうと座し思ひ極めし身の覺悟、お園は筐の黒髪を撫つさすりつ肌に添へ、七度結んで姉と成り、六度契りて妹といひかはしたる甲斐もなき、親の敵を現とも夢知らぬ稚子に、さぞや心の引されて、迷ふて居やるで有ふのふ、迷ふてなりと、今一目姿形を見せてたも、逢たわいのと聲を上、くどきこがれ歎きしか、漸々涙押とゞめ、ヲヽそふじや此切髪をそへとせば兄弟寄り添い居る心、先の世までもはらからの契忘るな長かもじ、其小枕の事迄も、未來は黄揚の櫛のはに、解ほどかれぬもつれをも、しのぎおふせて勝山と緣喜祝ひし黒髪の、色もつや〳〵烏羽玉の、闇こそ幸ひ友平は、腹存分に切あばき、一ト息ほつと月影の、出汐はおのが身の知死期、苦痛隱せど夫ぞとは、悟りしお園も氣を張詰め、ヲヽ天晴健氣の切腹は、慥かに園が見屆けた、此世にござる母様はたとへ御用捨有るにもせよ、未來におはするとゝ様へは、命捨てずば言譯立まい、ヲヽよふ腹切つた出かしたなあとはいふ物の不便やと悔み惜めば友

平は、一期の終り大聲上、ハヽ、有りがたや、忝けなや、ふがひない奴めでも家來と思し召せばこそ欺きなされて下さるゝ、エヽ勿體ない罰當り、申譯に成る事なら、下郎めごときのどん腹を百二百切たとて何惜からふ、よし御宥免有るにもせよ、此樣な不吉者が、大切な敵討に何とお供が致されませう、エヽ淺ましい業さらしと、我と我身を搔むしり、五體をもめば疵口より、流るゝ血汐紅に草柴染なす血の涙、落たる守の臍の緒を、引摑んで眼を見開き、エヽ思へば〳〵腹立ちや、主人の敵、我身の仇、何國に隱れ忍ぶ共、一念通さで置べきかと、怒りの齒ぶしに嚙しめ喰さき、池水へはたと打込み引取息、俄にはげしく逆浪打吹上吹卷く水煙、忽お園が懷中に音を啼千鳥香爐の不思議、ハテいぶかしや池水はげしく立登れば啼音を發する千鳥の香爐、もしや吉事か、但しは凶事か、何にもせよ怪しき業を見聞くよな、ヲヽイ〳〵ヲイノ行といふのにせはしない、頻りにおれを呼返すは、誰じやぞいやい、何所からじや、慥か爰らに聞へるがと、うろ〳〵戻る銅八は、池の邊りに聞耳立テ、ヤ、何と明智光秀の亡魂じや、ハテノウ其わろが又何でおれを呼返した、ムヽ、ヒヤウ、ヤア〳〵〳〵、すりや今迄、眞實の親と思ひおつた、小島の郡代京極新左衛門は我を拾ひし養父にて、誠の父は明智殿で有つたよな、ハヽア思ひ合せし事こそ有れ、晉成が館にて四法天但馬我を見咎め主君の面ざしに能似たり、光秀殿の忘れ筐にして有べしと、ゆつたる詞ひし〳〵と、今こそ思ひ當つたり、エヽさはしらずしておざ〳〵と、あつたらしき郎黨を失ひしこそ殘念々々、併心得がたきは此年月、過行き去つて今日只今、呼びかけられし仔細はいかに、ムヽ扨は山崎の合戰に打負け、此所に命を落す際迄も、帶せられたる蛙丸の名劔、久吉が手に渡らん事を悔み、是なる池中に隱せしとや、御首をも此池にて

洗ひ流せし其血汐、こりかたまりし魂魄殘り、守護せられたる名劔の、其名を感じ集つたる、蛙の聲を假初に、素性をしらせ劔をも、讓り與へん御所存とな、ハヽ、有がたや忝けなや、其上に我行末の事迄も、思し召れて久吉に遺恨の刄は合す共、四海に望みをかくるなとは、後車のいましめ子を思ふ父の大恩、ハヽ、勿體なやと三拜九拜悅び涙いで亡父の御賜拜領せんと浮草を、かき分探り當り名劔押戴いて拔放せば、劔の氣を得る蛙面の相、猶も頻りに蛙の聲、又も泣出だす香爐の奇特、思はず兩人飛開き、互にすかし見て見ぬふり、劔を鞘に曲者は納り返つて行先に、向へばよくる右左、付きまとはれし蔦かつら、長き契りを神かけて、忘れぬ人を今更に、いなしはせぬと引留る、往來を妨げるわりやまあ何所の者ぞや、私が生れは永祿九年五月十日の誕生ヤハテ夫か父何で爰に居りや、ハテわしや惣嫁、惣嫁ぢや、サアそふでなくば傍へ寄つて抱付て見やしやんせ、自慢じやなけれど伽羅の香は幾夜留ても留飽ぬ、そふだんに成る氣はないかいなと、もたれかゝれば、有がたい初對面からはずんだせんさく、斟酌なしに付合ふからは、善は急げじや、今爰で泣して見たい此懷、チヽしこなしやの、肌打あけるはお前の心中見たくば見せう望みが有る、サア、望んで見たいは此劔、イヤあぶない事よしにせい、イヤ切るわいの、ソリヤ誰を、指をわしから心中見せるのじやと、いふより早く劔の鍔際、物打しつかと取頭渡せ渡さじ一二のせの帶取り引ひじくる計捻合ひ引合、引取るはづみ、拳放れて夕顏の棚へはからす刎上れは取おろさんとかけ寄るを、やらじとさゝゆるお園がひばう、早足の當身にたぢ〳〵〳〵たぢろく隙にかけ登れば、つゞいて後よりかい〳〵しく、身はむさゝびと這上り互に探し尋ぬる太刀、取よりいらつて切かくる、强氣の曲者劣らぬお園、打合ふ刀は氷柱のごとく、

微塵に碎け飛散るにぞ、邊にしさり身を構へ、鍛へ刀も名劍の、德におされて折れたる物が、ヲヽ、不思議をあやしみ音を啼し、其香爐こそ久吉が、秘藏の器物と聞たる故、碎いて暫時の腹いせ、又是なる夕顔の實のりし數の瓢こそ、取も直さず千なり瓢簞、眞柴か家の馬印しまつ此樣に小踊りし、只一なぎに切り拂ひ、直に踏込み打かくるを、くゞるは神力くさり鎌、てう〳〵はつしと請留て、今打ちかけたる虎亂の太刀、切先き下りに打ちおろすは、もしや尋ねる敵かと、いふ間稱妻劔の電光、ひらりと飛で遠近の、霧に紛るゝ曲者を遁さじものと一足に飛んで折しも、さへ渡る、月の光りを力にて、後を慕ふて、追て行く。

六助住家の段

〳〵我家をさして立歸る、勝負は見へた彈正殿、お手柄〳〵、立合ひ召るゝと早勝ちと見へました、何と曾平治殿違ふた物ではござらぬか、いか樣、軍八殿のいはるゝ通り適れ御手柄でござる、ヤイ六助、我に勝つ者あらば奉公せんなどと、人もなけ成る廣言は、最早是でいはれまいがな、イヤモ段々誤り入りましてござります。何か山拝の透間には、在所の者共を相手に我流無法の叩き合、ヤレ六助は劔術がよいはの、兵法を拔て居るはのと、誰がいふとなき取沙汰、ぱつと噂立つたのが今での迷惑、誠の藝に出合ふては中々叶ふ物でござりませぬ。こはいの〳〵。イヤ知れた事だ儕が雜言吐を殿も憎しと思し召ばこそ六助に勝れし者あらば、五百石にて召抱へんと有る高札を所々に立て置れたにや、ヲヽサ、然る所鞍馬山の僧正に閉口する劔術者微塵流の親玉が現はれ出し故、殿にも甚御悅び、卽ち御前において兩人が立合ひ、御覽遊ばされたく思し召せど、家老職殿が、今一いき不呑込みだから儕あばらやにて立合せ、打勝においては召抱へよと、兩人へ早分の役仰付られた、

よつぽどむつかしい試合で有ふと思ひの外、イヤ手間も隙も入る事か、彼城下町へすゝ取に古疊を叩くより心安く見へたわい、ハヽ、、扨て先生恐れ入つた、イヤ先衣服を召替られよ、早う〳〵〳〵と廣蓋に吉良流の折形包熨斗目の衣服、麻上下、御紋付き、きせかゆれば、忽見かはす其人柄　詞付き早横柄に、イヤナニそこ者例打負けたれば迚、力を落すか、是からが修行の所だから　隨分出精いたしたがよい、後にはよく成ふ〳〵、コレ先生いらざる御教訓を構ひなされな、ヤイ儕御領分のやつなれば、お慈悲を以て深きお咎め有るまい、なれど以後をきつと、嗜みおらう、ソレ家來共乘物是へ、イザ先生お召なされ、是は憚り、やつぱり此儘歩行致さう、イヤテヤ只今よりは殿の御師範我らが爲にも先生なれば、ひらに〳〵、然らば御免と乘移るを、直に舁出すお六尺七　去つて師範を得、悦びいさみ出て行く。門送りて六助は、つつくり立て獨言、ア、誰しも孝行には仕たい物、見ずしらずの人なれど　親御を大事に思ふて、侍のいひにくい事を打割て賴ましやつた、其實心な所がどふも、もたしがたなき、契約通り打まけて進ぜた今日の試合、イヤコレ必ず禮には及ばぬぞや、是もやつぱり親の威光故じやと思ふて、存生の内に隨分と孝行を盡さつしやいませおれが樣に死別れといふ物は何したとてとんとまめしげはないぞいの、必ず大切にさつしやれと、いひつゝ見やる畠道、眞黑に成つて山賤共、すた〳〵いきせき走り付、サア〳〵〳〵六助殿内へ這入つた〳〵、へしやげたはいの〳〵、こちら迄も鼻がへしやげたはいの、ハテやかましい何の事じや、何の事とはこなたの事じや、六助に勝つた者は抱ふと、殿樣から方々へ立て置しやつた高札を、奴共が皆引拔いていんだはいの、じやによつてへしやげたはいの、〳〵、ソリヤ何ぞあつちの勝手づくで持ていんだ物で有うぞい、イヤ〳〵そ

れ斗りじやない六助めがほうけたとはきつい違ひ、ぶたれずつた其のいぢらしき、大方骨が碎けたで有う、イヤ今時分泣々天窓のかけを待ねておるで有ふのと　口にぬかしていにおつたが、こなさんほんまに負けたのかい、イヤ嘘じや、殿様の御定じやから、勝負をせふといふては來たれど、爰で立合ふては晴立ぬ、殿様のいひ付けならば御前きらいがよい、小倉からお召なされてから、何時でも行て勝負せふと追戻したが、それを腹立て悪口いふたので有ぞいや、ムヽそうかいなあ　それに又額の其疵は、是か、是はあの、夫々、あの着者干に出て　入口の石に蹴躓き竹垣で摺破つてのけたのじやと嘘もまつかい血にそみし、額押へてくらめる詞、しぶ〳〵ながら栗右衛門、イヤコレ殘りの衆ら謎が有る、六助先生が今の詞とかけて、ムヽ何と解の、サア極めて有、掛目よりたんと有る干鰯と解く、其心は　ハテまけた聲じやと思はるゝと、にがり切てぞ歸りける　あいらがあの様にいふのは十年も習ふ師匠じやと思ふからの親切馴染のもの共に愛疎つかされても、人の爲に成る事ながら、いとひはせぬ、併し得心した事ながら、負たと思やがつくりと力ない、ヤ是は扨腹迄が急に力なふ成た程にの、ラットよし〳〵昨日庄屋から貰ふたぼた餅、鼠が引かずばやつぱり其儘有で有ふ、ドレ　孤殿にも喰さふと、表に出てそこらを見廻しコレ孤殿戻らしやれ、それがけへやなど落まいぞ、是は又何處に遊んで居る事ぞ、孤殿々々、イヤイヤ戻つた所で彼ほた餅がなくては手持ぶさた　先有かないか見てこふと子供にさへも偽りをいはぬ生得生拔し、梅と椿の大木を、直に住家の門柱立そふ花も八重ふきの霞の屋根に蔦の壁草のとぼそに彳む老女、外面に干たる四身の小袖、ハテ心得ずと、差覗き見入る家の一壁に鐵棒鼻捻山刀半弓なんぞかけ置しは、山立にても有らんかと心に納めしとやかに、心願有て國

國の神社を巡り年寄の一人旅、脚を痛め迷惑致す、暫しの舍御免なれと案内聞より六助は納戸を出て迎く見れば御老人の旅勞れ、嘸御難義、宿はせず共休足程の事は、緩りつと御勝手次、是は〳〵恭ない左様ならばと打くつらき、圍爐裏に緩り、鑵子の下さしくべる木もほた〳〵と、心置きなき饗應に、イヤのう御亭主どふやら獨住の様に見請ましたが左様かの、但し御兩親でもござるかの、イヤイヤ母一人ござつたれど、近き頃相果られ、今ではほんに寡ぐらし、それは不自由にござらふ、何と物はいふて見ず、じやがわしを親にさつしやれぬか、期見た所で、丁どよさそふな親子ではないかいのずつかりした事いふさ顔、どふやら小氣味悪じやれな、ハヽヽヽ、座興も旅のうさはらし、テモ風の憎いお年寄りじやのふ、イヤコレ座興じやない、養親に成りませふ、そりや又なぜな、サア心ざまのたくましそふなコなたと見込んで來た事じや物まんざら、無手では來ぬはいの、コレ爰に四五十兩程はしつかり土産も持つて居るし、また其上に味い金設けの相談も有るはい、サア〳〵早ふ親子に成つて何もかも覆かくしなしに、打明けて談合する氣はないかいのと、金から取入る一詮義とせけ共せかぬ小默頭、チヽ品に寄つたら談合もせう、親にもせうがとつくりとおれが心は極る迄、退屈ながらあの一間で、マアゆつくりと待たがよい、夫ならとんと腰すへて、やんがて孝行請けませふと互に探る肌刀身内としらで誓くは、疑ひあひの破障子引立てこそ入りにける。跡には不審とつ置いつ、思案吹ちる春風に、梅が香したひ鶯のさへづる聲に法華經も、既に暮れぬと告けぬらん。ハハ刻限も違へず鶯が、もう鳥屋に來た。いかさま、鳥でさへ法華經とさへづるに、身のせはしさに取紛れ、念佛もろく〳〵に得申さぬ。アヽ勿體ない〳〵、申し母者人、如才じやごんせぬぞや、必ず叱つて下さる

なと、位牌に向ひ合掌し、在すが如き孝行を、感ずる天の加護やがて深き惠も有りぬべし。一心不亂他念なく、打鳴らしたる鈴の音に、さそはれ歸る幼子の、口元しほしほ亡き母と、知らでこがるゝ子心に、聞覺えてや拾ひ取る。小石積みては母様と、したふ涙の雨やさめ、草葉におちておのづから、手向の水の哀れなる、賽の川原の目前に、見やる六助こらへ兼ね、其儘かけおり抱上げ、尤もじや〳〵、尤もじやわやい、どうぞ逢はしてやりたさに、どこじやと問へどわかちは知らず、勿體預けしやつた人ば、只一言も得云はぬ最期、スリヤいづくの誰が悴かは知らねどいたいけにしほらしう、伯父様伯父様とまはす物、憎まうとて是が憎まれうか、可愛いや〳〵〳〵可愛いやな、コレ伯父様、かゝ様はなぜござらぬ、かゝ様欲しい、かゝ様ないと泣叫ぶ コレ、その様に親をこがれて、煩ひやなどしてくれなよ、ひよつと死んだら今の様に、賽の川原で石の數、一重積んでは父をしたひ、二重積んでは母親を、たづねこがれて六道の、地藏菩薩に取すがり、父よ母よと泣くといやい、おれも二人の親にはなれ、女房も無ければ子供も同然、ほんに親に逢はれる程ならば、賽の川原はまだな事、八萬地獄の底へでも、尋ねて行きたい逢ひたいもの、なに辨へない心から、逢ひたがるのは無理じやない。オヽ道理じや〳〵 可愛やと、抱きしめ〳〵、聲立てゝ、男泣にぞ歎きしが、漸う涙おし拭ひ、アヽ惡い孤兒殿。おれ迄を啜かして泣かした程にの、サア〳〵さつさつぱりと機嫌を直して、コレ昨日買ふてやつた疣太鼓、夫をたゝいて遊ばしやれ、イヤイヤ、太鼓はいやじや、おりやねむたい、かゝ様と寢たいわいなう寢さして欲しいと稚子のわやくもぐわんぜ、泣寢入。ホヽ、コリヤもう寢入つたさうな、ハテ子供といふ者は、とんと罪のない佛様では有るわいの、ドレ、伯父が寢さしてやらうかと、興に

ふしどの草莚、折節竹の、音も冴えて、吹きくらしある虚無僧の、宿求めんと籬に寄り、ム、爰に干してある此四ッ身は、慥に覺えある小袖と、取らんとするを後から、こりや盗人めと二三人、摑みかゝるを寄付けず、振廻したる尺八の、たけに手利にぶら〳〵共、眉間肩先腕骨脊骨、ぶちのめされてちり〳〵に　皆我先と逃歸る。六助内よりきつと目を付け、見れば賣僧の僞虚無僧、よい程味を、へゝやりをつたと、なじる言葉を聞きとがめ、ナニにせ虚無僧の賣僧とは、ハテ、捉にちがふた身のまはりといひ、第一宗門の姿で喧嘩口論ならぬはず、又常人が理不盡を言ひかけても、隨分如法に濟ませよとは、本山からの戒でないか、其上尺八の本手は吹かず、今時流行る雜な手を吹き歩くからは、にせものと云ふたが誤りか、山賤はしてをれど、夫程の事は知つてゐる何とでごんす梵論字と、言葉に一癖さる者と、見てとる此方も笠脱捨て、オヽ其返答して聞けんと、ずつと入るより替筒に、仕込みし短刀き拔放し、家來の敵と打かくるを、ひらりとかはし、しつかと取り、ハヽヽヽ、ちよつと、るから女とは悟つた故に咎めて見たが、敵と云はるゝ覺えはないぞ、ヤ覺えがないとは卑怯な奴、杉坂のとりにて、五十有餘の侍を手にかけて、路銀は勿論妹が、忘れ筐の稚子迄、奪ひ取つた山賊め、赦しはせしと振ほどき、尖き切先無刀の六助、拔けつ潜りつあしらふ手練、遁がさじものと付廻す、屏風の中より伯母様かと、かけ出る稚子見て恟り　不審ながらも小脇に引抱き、心赦さず身がまへたり。コレ伯父様、伯母様が來てじ大鼓たゝいて見せていなう、オヽ合點じや、合點じや、ガマ後に、〳〵、イヤ今じや、早う〳〵とぐわんぜなう、廻せは廻る子可愛がり、持遊び箱を引寄せて、ソレ今鳴らすぞ、コレマ聞かしやれや、廿三日は母者人の四十九日、杉坂の墓所を戻りがけ、泥坊めらが二

三人、五十許な侍を、切るやら突くやらなぶり殺し、見るに見兼ねて片はしからのめらせ、介抱すれど物も得云はず、其子を指さして、拜んだばかりがつくり往生、目前敵の盗人めら、踏殺して谷へ蹴込み、つれ戻つて其子に問へど差別はなし、そこで思ひ付いたァレあの着物、門口に干して置いたは、其子の所縁を知らうため、心が早う屆いたか、現在の伯母御に渡せばこちも安堵、ようまあ尋ねてごんしたのと、悅ぶ體に僞なき、眞實見ゆれど猶も根を押し、しかと其言葉に違ひはないか、イヤ何がこわうて僞云はう、くどい尋ねにや及ばぬ事、シテこな樣の名は何といふ。オ、六助と云ひまする。ヤア何と。サア、毛谷村の六助といふ、山賤でごんすわいの、ヤア、すりや八重垣流の達人、音に聞えた六助樣か、エ、と呆れて取落す子は狼狽に逃込めどもしらず、構はず六助を、うつかり眺め見とれゐる。今の樣にいふても疑ひ晴れず、やつぱりおれを敵にするか、エ、、わつけもない、何の家來の一人や二人、どうなとしたがよいわいなと、前に寄添、後に立ち、テモマア適れよい殿御、マア仰よりか落ついた。イヤ〳〵、まだ落付かれぬ事が有るわいの、イヤ申し、お前には女房樣がござりますかへ、イヤ樣子有つて女房は持ちませぬ、ありやせまいがな、ないかへ〳〵、オ、嬉しや〳〵、それではほんまに落付いた。コレイナア。お前の女房は妾じやぞへ。サア女房じや〳〵と、かきたくる程今迄も、逢ひたう思ふた重荷が下り、三衣袋も茶袋に、して見たがりの水仕業、袈裟も襷とかけ德利、酒もあげうし夕飯の、こしらへせうと釜の下、薪のしめり燃えかぬる。火吹竹はと尺八を、取違へてはをかしがり、獨り御機嫌六助は、承知内儀のふり賣を、持て餘したるむつと顏、とんと譯がしれぬ、今日程けぶな日はない、見ず知らずのわろ達が、イヤ親にならうのかゝじやのと、押入女房の手引し

た、あの子もめつたに油斷はならぬ、全體こなたはマア誰じやと、尋ねにはつと心づき、俄に行儀改めて、云ふべき事も後や先、常々父様のおつしやるには、豐前の國毛谷村の六助といふ者こそ、劍術勝れし器量の若者、行末はそちと娶合せ、吉岡の家を相續させんと、おとづれ通じ置いたるぞと、仰せを守る此の年月、廿の上を越ながら、眉を其儘、いかなこと鐵漿も含まぬ恥しさ、推量なされてくださんせ、スリヤそこ元は、吉岡一味齊殿の、ハイ、娘の園でござります。コレハしたりと手を取つて無理に上座へ押直す。ハ、、先何角差置き、お尋ね申したいは御親父一味齊殿、御健勝で今にお勤めなさるか、御老體の事なれば、自然のお勞れにて、若し御病氣など起りはせぬかと、寢ても覺めても心ならぬは是一つと、問はれて園は涙ぐみ、申すもあへない事ながら。おいとしや父様は、隣國周防の山口といふ所でな、ヤ、何が何んと、どうなされた。口惜しやや、〳〵と、欺し討たれてはかない御最期。イヤア、シテ〳〵其相手は、町人士民でよもあるまい假名は何と、何國の誰、同じ家中に名を得たる、劍術師範の京極内匠、ム、、シテ此豐前へ來られしは、敵の在所は當國と知つてか、但し知らずにか、サア、所々方々と身をやつて、云ふに云はれぬ憂き艱難尋ね探せど敵の行衛、今日が日迄も知れませぬわいな。ホイ、はつと計りにどうと座し、拳を握り悔み泣、園は取分け悲しさを、やるせ涙のくどき言。ほんに浮世といひながら、身に憂き事のかくばかり、重る物か父上の、敵を願ふ門出でに、可哀いや弟は盲目の、儘にならぬ身を悔み死。跡に見捨て、古郷を、出づるもちりちりはなれ〳〵、在所を探す其うちに、悲しや妹も劍の難、父上のみかそもやそも、二人三人があぢきない、双の霜と消え殘る、母とわたしが憂き苦勞、つらい、悲しい、恥しい、なりも形もいとひなく、雨露雪の深山路や、野末にある、一ッ家に、もしや隱れて居やうかと、人なき道に日を暮し、さまよひ歩く親と子が、便りない身

の上もなき、便の人に廻ひ逢ひ、わたしが心の奥底を、明すは二世の我夫、必ず身捨てゝ下さんすな、可愛いと思ふて給はれと、くどき歎きて伏ししづむ、ひたんの涙六助も、かゝる憂きには猶更らに、思ひ忘れぬ一昔、彦山の麓にて、目なれぬ老翁にま見えしが、高良の神の使なりと、兵法印可の一巻を下されし、其老翁こそ吉岡殿と、察せし事は彼の巻の、奥にありありと御姓名、書添へられしはこなたの事、夫婦となつて吉岡の、家名相續致せよと、六助如き拙き業、つたへ聞かれて有難や、神の使と僞つて、印可を與へ其上に、汝に勝つべき者あらば、夫に從ひ身を納め、末長久榮えよと、教訓ありしは後々まで、我慢を押さゆる御情たとへん、方もなき大恩、肉にしみ、骨に通つて忘られず、母だに見送るからは、尋ね登つて恩を謝し、師の御顔をしみ〳〵と、拜せん物と思ひしも、皆むだ事となつたるか、エヽ殘念や、悔やしやな、せめての筐師の片われ、あらなつかしやとお園を拜し、迸る涙はら〳〵〳〵、腸を斷つ思ひにて、したひ歎くぞ不憫なる。時に障子のうちしはぶき　ホオヽ師匠をしたふ誠こそ、はるかに屆き冥途より、閻浮に歸る一味齊、對面せんと聞ゆれば、思ひがけなくお園は悔り、ヤア、さうおつしやるは母様かと、嬉しさとつかは押ひらく、内につこと以前の老女、柔和の面皺の波、衽襠着なし稚子の、手を引きつれて立出つるを、見るよりはつと飛びしさり、師の後室とは夢いさゝか、存ぜぬ事とて最前は、ぶこつのあしらひ無禮の段、偏に御免下されかしと、謝り入つてぞ平伏す、イヤなう、さつきに逢ふた其時は、婿殿とも姑とも、互に知らねば他人も同然、今こそしんみ泣き寄りし、親子が爲の鐵の、立通したる娘が操、不憫を思ひ睦じう、夫婦になつて下さらば、本望とぐるに疑ひも、亡き我夫の此魂、婿引出にとさし出せば、ハハヽこは有難き師の筐、辭退申さず頂戴せんと、押ひいたゞきし獻々の、盃三々くどからず、古た生娘今日よりは、手扮らせ初むる花嫁御、母も喜ぶ其所へ。爰じや爰じやと杣仲間、遠慮亡骸戸板にのせ、どやどやとかき

込んで、コレ六助殿、聞かしやませ、廿三日の事であつたがよ、此斧右衛門のおばゞが見えぬとて、仲間中が手分けをしての、ォ、テヤ、何が所々方々と尋ね歩き、よう〳〵と杉坂の土橋の下で見つけた所がよ、此やうなおかつて絹を引つぱらせ、むごく殺してありましたよ、敵がとつてやりたけれど、どうどもでは何として〳〵、サ、サ、そこで頼むは六助殿と、いふにかけおり死骸の傍立寄つてとつくと見、ム、スリヤ此死骸はそちが母か、アノ是が、フンと眉に皺、思案の體に杣仲間、コリヤ斧右衛門、しめり伏さずと頼みやれと、引起されて泣じやくり、ァイ〳〵、皆のおいやる通りじやよ、敵を取つて下さませ。ァ、死しやるはしか其畫間、梅鹽よふ出來た自慢の團子棚からころり其身もころり、手でこねたとて、でこねるものか、何ぼう杣がじやとて、斯くしやきばつた枝骨は、おろさゝ桶へ入るまい、はひりともない死出の山、覺束なかろなうばさま、ばさま〳〵と呼子鳥、欲に響き泣く涙落込む谷に水かさの、いとゞまさりて見えぬらん。始終とつくと聞きすまし、ォ、氣遣ひするな、今に敵を取つてやる。其死骸大事にして、内へ行んで香花取れ、サア早う連れて行け、早う〳〵と六助が、言葉を精に斧右衛門、ァ、其樣にいふて下さるのか、ばさまの爲にはお寺樣の御引導、ノウ皆の衆。ォ、テヤ、あの人があゝいはすかや、ちつとも氣づかい泣顏を、笑顏に直して歸りける。跡に六助無念の顏色も、扨は杣が母をたらし込み、おのれが親と僞はつて、孝行でかしに六助を、深い所へやりをつたな、ヘエ、思へば〳〵腹立や、卑怯未練の微塵彈正おのれ此儘置くべきかと、胸もはりさく怒りの齒がみ、庭の青石三尺ばかり、思はず踏込む金剛力、イヤコレ、婿殿待たしやれや、こなたの腹を立てさしやる、相手の苗氏は微塵とや。いかにも、おのが流義を其儘に、氏となしたる微塵彈正、ナニ。其流義の名が微塵となシテ其者の年輩は卅二三至極の骨柄、面體白く目の中さえ、左の眉に一つの黑子、慥にあり〳〵左の肘、二の腕かけて刀疵、扨てそなァ、同じ家中と云ひながら、お

園と云ひ此母も、見知らぬ敵の人相書、菊に尋ねし其砌、書かせ置いたる此繪姿、まだ其上に、妹が死骸の傍にありしとて、小栗栖村にて友平が、後の證據と渡したる、此の臍の緒の書付に、永祿九年の生れとある、月日をくれば卅四歳人相といひ年の頃、割符の合ふたは尋ぬる敵、親の敵、菊が仇、恨を晴すは今此時、嬉しや娘　片時も早う、母様用意と勇立つ、ァ、コレ〳〵二人ともに、マァ待つた。慥にそれと知れたれば、六助が爲にも師匠の仇、コレ氣つかひせまい、敵は討たすが眞劍當てぬ其先に、木太刀で試合の意趣がへし、ぶつて〳〵ぶちのめし、申請けての敵討、お袋　女房　いざ一所にと取出だすやぶれ、上下手傳うて母は腰板あてがふ紐、お園が取つてしつかりと、結び合ふたる妹背の緣、コレ伯父様、ぼんにも敵討たしてや、ォ、、出かした、かしこい〳〵、ャ強いなァ、どりや行かうかと、いふより早く、ひらりと庭へ一足飛び、コレ〳〵婿殿、輕き相手と侮つて　必ず不覺を取るまいぞ、さうとも〳〵、欺すに手なし、油斷なされたこちの人、ムゝゝ、ハゝゝ、何さ〳〵氣づかい無用、一旦こそは得心にて負けてやつたるうち蟲め、謀り取つたる五百石、かゝへられたも我情　却つて足を擊ぎしは、もつけの幸ひ寒翁が、味ふ出あふた妻姑恨は倶に六助も、天地に慙る義の一字、や鬼神とて京極内匠、我見る目には一つまみ　しかし御知行戴く中は、殿の御家人討得がたし試合を願ひ勝つた上、直に仇討御免の訴證、元首抵へ、討たす〳〵討たさすと、實にも尖き魂を見極め置きし吉岡が、眼力違はぬ若者なり、お園は猶も勇み立ち、唉亂れたる紅梅の、花の一枝折持つて、ナウ〳〵我夫　梶原源太景季は、平家の陣に切入つて、譽を上げし箙の梅、これは敵の京極に、勝色見する此花の　可愛男へ壽と、いひつゝ抱きつきたさも、親に遠慮の手をもぢ〳〵　母も同じく椿の一枝、本望遂げた其上で、直に八千代の玉椿　かはらぬ色の花婿殿、いざと打連れ立出づる、三人が、中に彌三松は、ほんそう小倉の領内へ勇みすゝんで出でゝ行く。

酒屋の段

中竹本　南部太夫
野澤吉彌
切豐竹古靱太夫
鶴澤清六

人形

丁稚長太　吉田榮三郎
半兵衛女房　吉川小兵吉

三勝半七　艶容女舞衣

酒屋のだん

之は豐竹座へ書卸された淨瑠璃で、作者は竹本三郎兵衛、豐竹應律、八民平七の三人、矢張合作であります。安永元年十二月の事でございます。

上、中、下の都合三卷もので、上が生玉の段と島の内茶屋の段、中の卷が新町橋の段と長町の段、それから下の卷が今宮戎の段と及び上鹽町の段、と之だけの内容に成つて居りますが、今度出ますのはお馴染の最後の上鹽町の段、卽ち「酒屋の段」であります。

最も流行つて居ります淨瑠璃の一つで、「今ごろは半七さん」の文句の如きは何方も御存じ、例の堀川のどゝ並んで人氣のあります所であります。お園の貞節に至つては、もとより然る事ながら末段に近く捨子お通、守袋からあらはれた其父半七の遺書を、一族額を集むる燈火の下、互ひに讀み合ふ涙のうち、それを絡ふて聞こゆるは隣の稽古うたへ鶯の片羽のとぼ〳〵と、子にまよひゆく小夜千鳥、あはれにも無ざんな、外には心中にゆく男女の淋しい姿、景と情と兩々相俟つて哀切の極みと申すべきであります。

美濃屋　三勝　桐竹紋太郎
茜屋半兵衛　桐竹門造
五人組　吉田利男
親宗岸　吉田玉次郎
嫁おその　吉田文五郎
娘おつう　吉田文糸
茜屋半七　吉田市松
宮城十内　桐竹政龜
庄九郎　吉川王德

◇床本

〳〵古郷は大和五條に名のみして今は浪速の上鹽町、格子造りも小づくりに三輪の山本ならねども、杉立軒の酒ばやし、味淋白酒燒酎の看板もからい渡世なり。賣場に居眠る丁稚の長太酒壺で天窓こつつりアイタヽどいつじやい人の天窓を擲きおつたは、ハア誰も擲いたのじや無かつたおれがでに打つたのじやア、何じや何じや又彈くは彈くは隣の須賀都の稽古じやさうな、何ぞ面白い事を唱へばよいが〳〵可愛らしい前髪を、あいそもこつそり坊様に、せふ事もなき浮ふしの、爰ばつかりに日は照るまいし、ハアヽコリヤ萬年草をやらかしおるコリヤ面白いよいよ様長う頼みますと、身を腹ばひに寢はらばい餘念他愛も納戸より、立出る此家の女房、ヤイ長太よ其なりは何じや今日は親父殿を代官所からお召でお年寄や町のお衆とけさから行かしやつた故何事がおこつた事と、内で兎や角案じて居るに、其氣もつかぬ白痴者、嗜みおれと呵られて俄にしよげつまじくじと、水洟すゝるばかりなり。早日も西に片かげを　歩む姿は一風ある二つか三つの子を抱き、酒屋の暖簾押明けてお邪魔ながら酒を少々下さりませと、内へ入れば、何じや酒くれ此方の家にやる酒は

無い通りや〳〵、イヤ私は物貰ひではござんせぬ好い酒が一升買ひ度うござんすと云ふに女房立寄つて、又しても呵呆めが粗相ばつかりぬかしおる、お赦しなされて下さんせ、よい酒と仰しやるは名酒でも上ましよか、アイ遣物に致しますのじや程に隨分よいのを内方の塗樽に一升入れて下さりませ、オ、お遣物なら相生がよからうと埃を拂ふ塗樽に上具さし込み小きんののみ、よい程らいに詰樽の口にべつたり名物の書付手早に張つて差出せば、ヲ、相生とは目出度い名酒價はそこへ宜しうとお錢取出し差出し、近頃わり無き事なら、内方のわろ衆に此樽持たせて一寸そこ迄雇はかして下さりませぬか、ア、夫は何よりお安い事コリヤ長太よ胸前垂はづして此女中様に付いて往て、樽の明いた時取りに行く様に先様をよう覺えて戻らうぞヤ、申し仰、處迄なりと連れてお出でなされませ、ヲ、それはマア〳〵お嬉しやお禮は戻りに申しませう、こな様いかい太儀じやのと、挨拶つど〳〵つの樽を長太に持たせ出でゝゆく、引違ふて主半兵衛、老のかん調氣はいらくら急ぐ足取我家の軒後に年寄五人組打連伴ひ立歸れば、ヲ、親父殿戻らしやつたかお年寄様何方も〳〵いかい御苦勞、思ひがけ無い代官所のお召ゆゑ何事がおこつたと今朝から私は案じつゞけ氣遣ひな事じやござらぬかイヤお内儀さして氣遣ひな事じやござらぬ高が爰の半七が山の口で人殺した、ア、申しお宿老様半七が人殺サアせがれめが一頃とは違ふてぞけ出した故の勘當御挨拶は忝なけれど先づ其分になされて何にも仰しやつて下さりますな、女房共定めて案じて居やつたであらうが、何にも氣遣ひな事じや無かつた年の切れた證文の賣買すなハ畏りましたと何事なう濟んで戻つたが皆様は嘸御退屈、御酒でも燗して上ましやと夫が詞に悦ぶ女房、それはマア〳〵目出度い事、身に覺えなけれども時の災難で何んな事が起らうと案

じた程は悦ばぬ　皆様の草臥休め肴は無くとも御酒一つと立つをとゞめてアヽお内儀イヤモよしにさつしやれ〳〵下宿で支度して酒もたんと飲んで居れど理に入つたりして醉も出ぬ、アヽ氣の毒な事ではあると宿老の投首何とやら、様子ありけの折柄に、上の町からおい〳〵と泣いて戻るあほうの長太片手に酒樽片手に抱く稚子も倶に泣く我家の内、又呵呆めが餘所の子にせぶらかされたなエヽよい年して何のほえ様たしなみ居れと呵られて、イヽエこちやせぶらかさりやせぬけれどさつきの女がおれを辨天の内へ連れて行て、ちよつと其處まで行てくる程に此子をちつとの間抱いてゐて呉れといふてそしてから何處へ行たやら戻らぬに依つて、金比羅様や八幡様や生玉の内へと彼方へ行たり此方へ行たり尋ぬる中に此子が泣くに依つて夫で俺も悲しいエヘン〳〵やい〳〵何をぬかすやらそれは已れが呵呆じやに依つて、矢張辨天の内に待つて居ればよい事を定めて爰へ尋ねて見へるで有ろと泣く子をすかし抱取り、ヲヽよい子や姫御前の子じやそうなと長太が提けし櫓打ながめハアヽ變つた書付、進上茜屋半兵衛様とこちの名を書いてあるコレ見やしやれ親父殿と樽差寄すればハテ此廣い大阪同じ名も有らいでと云ひつゝ、見やつて眉の皺、進上上鹽町馬場先にて茜屋半兵衛様、ムヽ馬場先で茜屋半兵衛と云ふは此方の事じやが見りや此方の塗樽、コリヤ様子でも有る事か、イヤ様子と云ふはさつきに見知らぬ女中が酒買ひに來てアノ長太を雇ふて連れていかれたが其樽に此書付、ヤ何じや見知らぬ女中が酒買ひに來た、其時何の譯も云はず呵呆を雇ふて、ハテめんようなと不思議に立寄る五人組、爰らが宿老の分別所といふても詰る塗樽の、はげた天窓を傾けつ。半兵衛膝をてうと打ちハアヽよめた〳〵コリヤ捨子じやはいのヤアヽ捨子とは何を證據ハテ此方の内で買ふた酒に進上茜屋半兵衛様と書

付け、其子を呵呆に抱して何處やら行方の知れぬは疑ひも無き捨子此半兵衞を見込に養育賴む印の此酒サ何とそうじや有るまいか成る程成る程云はしやれば然んなもの何のよしみも無い人が酒呉れう筈が無い、是が捨子ならマア何と利口な仕様じやござりませぬかソレイノ密柑籠も入らずイヤモ新しい捨子の趣向コリヤはやりませうわいのシクガ捨子の筒持たせじや無いかやハテ何と致しましよモ斯うつき付けられた事じやもの養ふて遣らざ成りますまいヲヽ夫々斯んな事も緣のもの乳味湯でなりと育てませう、ホヽ夫はいかい後生じやイヤ其代り其子に付いて違論妨げある時は何時でも町が證人サヽヽ何と皆の衆之をはねにモウ行こうじやあるまいかイカニモ左樣と立上れば半兵衞夫婦つど〳〵に今日の御苦勞お世話の禮何やら物を言ひたけに振向宿老を目で止め稚子抱きおぢうばは一間へ〳〵こそは入相の、鐘に散り行く花よりも、あたら盛を獨寢の、お閨を連て爺親が、世間樣はぬ十德に、圓い天窓の光りさへ、子故に暗む黃昏時主の妻は灯をともし、表を締と急々と、出合頭に、ホヽ是は〳〵宗岸樣其處に居やるはお閨じやないか、アノ母樣、お替りもござりませぬかと、言ふ挨拶も何處やらに、疵持つ足の踏途さへ、低き敷居も越兼る。宗岸は遠慮なく、半兵衞どのお宿にかと姫を連て打通れば、妻は門の戸引立て、サア〳〵先づお上り成されませと、奥底も無き詞の中、夫と呼くより半兵衞が、一間を出る澁々顏、娘を連て行かれたからは、此方の内に用は無い筈何の爲にござつた事と、針持つ詞に妻は氣の毒イヤもふ、人樣に追從云はぬ偏屈な我夫、必ずお氣に障られて下さりますな。此間は嫁女の歸つて居られまして、いかいお世話でござりませふナンノ〳〵半兵衞殿の立腹は皆尤も、三勝とやらに心奪はれ、夜泊りして女房を嫌ふ半七、所詮末の詰らぬ事と無理に引立行つたのは娘に引を

取らすまい爲儕が氣迷ひ、夫から思案爲るに付け　唐も倭も一旦嫁に遣つた娘、嫌はれふが如何爲ふが、男の方から追出すまで、取戻すと云ふ理屈は無い筈、コリヤ宗岸が一生の仕損ひ、と悔んでも跡の祭り園めも晝夜泣き悲しみ、朝夕も勸まねば、若や病が起らふかと、見て居る親の心は闇、儕も天滿に年古ふ住んでゐれば、人に理屈も云ふ者なれど、誤りは佗ねば成らぬと、年寄の顏押拭ふて來ました、何彼のことは了簡して、今までの通り嫁じやと思ふて下されこれ賴みます御夫婦と謝り入つた る挨拶に、お園もうぢうぢ、手を支へ、爺樣の一徹で、無理に連られ歸りしが、一旦殿御と極まつた半七樣に嫌はれるは皆私が不調法鈍に生れた此身のとが、今から隨分お氣に入る樣に致しませう程に猶且元の嫁娘と、仰しやつて下さりませ、お二人樣と、跡は詞も涙なりオヽ何のマア、其方さへその心なら此方は變らぬ嫁姑、ノウ親仁殿、そうぢや無いか、イヤそうぢやない、昔唐にも例が有る太公望とやらいふ人の妻、夫に隙取り月日を經て、詫言に來りし時、鉢の水を大地に覆させ、其水を鉢へ入よ　元の如く夫婦に成らんと、太公望が云はれたと、且外講釋で聞いて來た、夫と丁度同じ事、此方の方から無理隙取つて、今更嫁と思へとは、何時まで云つても返らぬ事、口詞叩かずと、早う連て退じやれ〳〵と、膠もしやくりも納戸口、顏を背けてゐたりけるオ、其腹立は尤も〳〵、が重不々調法は、此天窓に免じ了簡して、何卒嫁に。否でござる、悴めも勘當したれば　嫁と云ふべき者もない筈。サア、夫も懲しめの爲當座の勘當。イヤ當座でない、七生までの勘當ぢや。ム、其又七生まで勘當した半七が代りに此方は何で繩に掛つた。ヤアサア半七とは親でも子でも無い此方が、今日代官所で何の爲に、縛られて戻らしやつたと、思ひも寄らぬ宗岸が　詞に恂り驚く、女房、嫁も俱々立寄

つて、肌押脱せば半兵衛が、小手を緩めし羽掻締。ノウ情無や何事と、嫁はうろ〳〵、女房も取付き歎けば宗岸が、イヤ、未だ驚くことがある、聖の半七は人殺し、お尋ね者になつたわいのと、聞くより二人は又悶り、夫は何故如何した譯、様子を聞かしてコレ〳〵半兵衛殿と問へども更に返答は差俯いて詞なし。宗岸涙の目をしばたゝき、一昨日のばん山の口で、善右衛門を殺したは茜屋の半七と、噂を聞いた時は、驚くまいか悶りせまいか、膝も腰も抜果しが、思へば不孝者、能い時勘當さしやつて、親に難儀の掛らぬは、未だ此上の仕合と思ふたは他人の了簡、違ふた此方の縛り繩、科極まつた半七が命、一日なりと延したいと人殺しの科を身に引き受、繩掛つた此方の心は、眞實心に子を思ふ親の誠と知れば知る程、宗岸が仕損ひ、半七の身の難儀此方も勘當して仕舞ひ、儕も娘を取戻したら、親にかゝる首繩も無い、能い事爲たと世間から譽める人も有らうが、親と成り舅と成るが、大抵深い緣かいのう、斯う云ふ時宜に成つた時は、譽めらるゝよりは笑はるゝが親の慈悲、片時も早うと連れてきた心はの、一旦嫁に遣したれば、半七が厭がるならハテ尼にしてなと此内で、御夫婦の亡き後の、香花なりとも取らして下されと、コレ手を合して頼みます、詫言が叶はねば、引放されたと突き詰て、短慮な心も出し居ろかと、案じ過して夜の目も合ず、母親は無し唯一人彼女を思ふ儕が因果、此方の繩目も半七が、科人に成つたら猶可愛かろ、譬へ又勘當が定でも久離切つたが誠でも、眞實親子の肉緣は、切るに切られぬ血筋の親、儕も此方程は無けれども娘は可愛い、まして勘當はせぬ娘愚痴なと人が笑はふが儕や可愛い不便でござる、これこれ聞入れて給べ半兵衛殿と、是まで泣かぬ宗岸が、堪へにこたへし溜涙を、たくし掛たる叫び泣き、我强う生れし半兵衛も、舅の心根思ひ遣り、

オ、道理じや〳〵宗岸殿、と、跡はないぢやくり、妻もお園も一時に、四人が涙洪水に、樋の口開けし如くなり。半兵衞涙の内よりもお園が顔を打守り、何から何まで氣を付けて孝行にして給る、斯なじや無い、世間の人の嫁鑑、半七が事は思はぬが、其方に別るゝ半兵衞は、能々不仕合せ、退せとむ無い、返しとむ無い、とは思へども、此方に置けば此儘若後家、儕は夫が可愛い、いとしうおぢやる、夫で詫言聞入ぬ、了簡して呼戻さぬ、これ嫁女、必ず酷いと恨んでばし給んなや、一人の悴はお尋ね者、翌日より誰を力にせうぞ、孝行にして給もつたが、今では結句恨めしいと、せき上げせき入る舅の脊擦るお園も正體なく、伏沈むこそ道理なり。半兵衞漸々顔を上げ、云はねばならぬ事も有れど、孝行な嫁女の手前、胸に窒つて言ひ悪い、宗岸殿奥の間で言ひ明さん、これお園、其方を更々嫌ふぢやない、氣に掛けて給るなや、舅殿へ話す中、暫く爰にと三人は悄々奥へ泣に行く心の中ぞ哀れなる。跡には園が憂思ひ、かゝれとてしも烏羽玉の、世の味氣無さ身一つに、結ぼれ解ぬ片絲の、繰返したる獨言（今ごろは半七様、何處に如何してござらうぞ、今更返らぬ事ながら、私と言ふ者無いならば半兵衞さんもお通に免じ、子まで成したる三勝殿を、疾にも呼入れさしやんしたら、半七様の身持も直り、御勘當も有るまいに、思へば〳〵此園が、去年の秋の煩ひに、寧そ死んで終ふたら、斯うした難儀は出來まいもの、お氣に入らぬと知りながら未練な私が輪廻故、添臥は適はずとも、お側に居度いと辛抱して是まで居たのがお身の仇、今の思ひに比ぶれば、一年前に此園が、死る心が付かなんだ、堪へて給べ半七様、私や此様に思ふてるると、恨みつらみは路程も、夫を思ふ眞實心、猶彌や増る憂おもひ、翌日はとうから父様に又連られて天滿へ往に、半七様の不圖した果敢ない便りを聞くならば、思ひ死に死ぬで有ろ、迚も浮世は立ぬ覺悟、嫌はれても夫の内、此家で死ねば後の世の、若しや契りの網にもと最

期を急ぐ心根は、餘所の見る目もいぢらしゝ。斯る哀れも知らぬ子の、合泣く聲に目や覺ましけん、一間を出て、乳飲まうといおば〳〵〳〵と、お園が膝に寄せ、ヤア其乃は美濃屋のお通じやないか、添ふ子の、顔見て恟り抱き寄せ、ヤア爰へは如何してござつたと、不審ながらも抱上ぐれば、半兵衛宗岸母親も一間の内を轉び出、オヽ、これ〳〵嫁女、忝ない其心、障子の内で聞く度に、拜んでばかりゐたはいの、禮云う事も澤山あれど心の急ぐは此子の事、美濃屋のお通と云はしやつたは、半七と三勝の、アイお二人の中に出來たお通と云ふは此子じやわいな。ヤアヤア親父殿聞かしやつたかオ、聞いて居る、其又お通を、ナヽヽ、何で

乳が飲み度

捨子にして此地へ越した是や理由が有らう、嬶懷か何所ぞに、書いた物でも無いか、早う尋ねて見やと言ふ内に、わくせきあくる守袋、内よりはらりと落たる一通取る間遑しと封押しきり、ヤア何ぢや、書置の事と書いて有る、ヤアヤアこれ〳〵嫁女其方の好い目でちやつと讀や〳〵アイ〳〵、ナニナニ十度契りて親子と成る、父の恩は山よりも高きとの世の教へ、我身にも辨へ居候へども、其御恩も得送らず、儘ならぬ義理に搦まれて、心にも有らぬ不孝の罪お赦し下されと度候、別て母様の御養育、申しお前の事でござります、能ふお聞き成されませい、オ、能ふ聞いてゐますわいの。唄へ〳〵聞いてゐるさの障子より、洩れ出る月は冴れど

胸の闇、合エ、時も時と隣の稽古然して其の跡は、何と書いて有るぞアイ母様の御養育海よりも深き御惠み、親父様御機嫌悪い時には、蔭になり陽になり幾千萬のお心遣ひも、泡と消行く我難儀、人を殺せし身と成り候へば、思ひ設けぬ御別れ。ア、夫なら矢張半七様は、オイノウ嫁女、善右衛門を殺しましたわいのふ。ハア彼善右衛門と云ふ奴が、大抵や大概、悪い奴ぢや無いわいの、彼んな悪者でも喧嘩兩成敗、我子の命を解死人に取らるると思へば思へば宗岸殿ロ惜いわいの〳〵、無念にござると述べたみ懷涙見聞くお園は以前の刎刀、南無阿彌陀佛と覺悟の體、是はと驚く、母、宗岸叶はぬ手にも半兵衛は漸々押へて、これ嫁女、とし寄ばか

りを跡に置き、死なうとは胴慾ぢやはい〳〵。エ、これが死なずにゐられませうか、放して殺して下さんせ。オ、娘尤もぢや〳〵〳〵わい、ヤ老少不定の世の中と、聞流したも今の身の上、みづ〳〵とした若い者。義理に迫つて死ぬるとは、ノウ半兵衛殿宗岸殿、思ひ廻せば廻す程、チエ、口惜いわいの〳〵。唄へ鴛鴦の片羽のとぼとぼと、子に迷ひ行く小夜千鳥、無残や半七は、今宵限りの命ぞと、三勝伴ひしほ〳〵と心に掛る我子の顔、名残にせめて今一目と、倶に戸口に夜の鶴、内には夫と白髪の母、心ならねど書置を又取上て讀む文章。人を殺し一日も、生長らへる所存はなく候へども、お通と申す娘一人ござ候て、殊にかよはき性質、不便さ餘る親心、夫に心が引かされて、今日まで長へ候へども所詮助からぬ身に候へば思召も省みずお通を遣はし候まゝ、私の小さく成しと思召され、どれ〳〵婆見しやいの〳〵エ、私の小さく成しと思召され御養育のお世話の程くれ〴〵頼み上候、子を持つて知る親の恩と、お通が不便さいちらしさに、お二人様の御恩の程、猶更此身に浸み應へ有難存奉候。又々心掛は、親父殿の御勘當。相果候後にてもお赦し下され候様。母様宜敷お執成、是のみ黄泉の障に御座候々々。オ、道理ぢや道理ぢや〳〵〳〵可愛やと泣聲洩るゝ表には、半七が、身に應へ斯る嘆きも我故と、思へば今更空恐ろしく身を悔んだる男泣、袖や袂を噛締々々、泣く音止むる憂き思ひ此方はお園が猶涙なくなく取上ぐる書置の、讀むも果敢なき世の中に、女は其家に在つて定まる夫一人を。頼みに思ふ者に候處、其頼みに思ふ我等がみもち、いつしか愛想らしき辭も掛ず、終に一度の添臥も無候へども、其色目も致さずして、親達大事夫大事と、辛抱に辛抱成され候段山々嬉しく存じまゐらせ候。今まですげなふ致せし事も、更々嫌ふでは無候へども、三勝とはそもじの見えぬ先からの馴染にて、子まで設けし中に候へば互に退去も成り難く、夫故疎遠に打過まゐらせ候。併し夫婦は二世と申す事もさふらへば、未來は必ず。婦にて候々。オ、是やまあ誠か半七様、こりややい娘、

未來は夫婦と書いて有るかいや有るかいや、アイ〳〵未來は未來ぢやが、一日なりと此世で女夫にして遣り度い〳〵、何としてマア此半七は、善右衛門を殺しましたぞ、どれ〳〵娘最少とじやどれおれが讀みませう。兎角不孝の我等に候へども、死後には嘸やお二人や宗岸様の御歎き、隨分々々力を付け此身に代りて御孝行に成し下されべく候。申し殘し度き事ども は數々候へども、涙に字性も見えず難く、あら〳〵惜しき筆止申候只上上は候。此上は只お通が事のみ賴み南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛亡人後のお念佛、南無阿彌陀佛と、讀も終ら宗岸親子、又伏沈めば半兵衛夫婦、お通を中に抱き上げ、初孫の顏が見度いと心に思へど、世間の義理で是まで逢も見もせなんだ、斯う言ふ事と知つたらば、顏見ぬ内が增しであつた。愛らし盛りの此お通、半七と一所に暮すなら能い樂みで有らふ物、これ婆見やいの、あれ何にも知らず手打やあば〳〵つかり。オイノ是や孫よ、モウ父も母も無い程に、此婆と一所に寢いよ、とはいふ者の乳も無く、今から先の寢起にも嘸や歎かん親々が、知らずにゐるか胴慾者、慘い心いぢらしやと、言ふ聲洩るゝ三勝が、思はず乳房を握り締め、乳は爰に有る物を飲まして遣たい顏見たい乳が張るわいのうと、身を慄はせ、駈入らんにも關の戸に空音も成らず羽拔鳥、親は外面に血の涙、子はやすかたの安からぬ悲しさ迫る内と外、一度にわつと湧き出る、涙浪花江泉川、小きんを汲出す如くなり半七は齒を嚙締め斯ばかり深き御情、是非もなや勿體なや不孝を赦させ給はれと、悔み歎けば三勝も皆我故の御事と、俱に詫入る中に半七、何時まで泣いても返らぬ繰言親父様の御繩目、早う解くは身の最期、イザ〳〵急がんサアおぢやと立上りしが、今生の別れにせめてお顏をと差し覗けば三勝も、お通を一目と延上り、見れども親子隔ての關何と千萬無量の想ひ、雨手を合せ伏拜み、合おさらば合〳〵と云ふ聲も歎きに埋む我家の中見返り〳〵死に行く、身のなる果ぞ哀れなり。

山の段

大判事竹本津太夫
鶴澤綱造
久我之助豐竹古靱太夫
鶴澤清六
定高竹本土佐太夫
野澤吉兵衛

妹脊山婦女庭訓

脊山のだん
妹山のだん

此の曲は、明和八年正月大阪竹本座に書卸されました「妹脊山婦女庭訓」の三段目の切でございまして、作者は近松半二、松田ばく、榮善平、近松東南の四名の合作になるものでございますが、外に後見と致しまして三好松洛が、行年七十六歳と肩書致しまして名を出して居ります。

此の淨瑠璃は王朝時代の入鹿の暴政を背景に致しましたもので、其の結構の雄大、趣向の奇妙、章句の艶麗な事は所謂王朝物の代表的傑作と稱せられてゐるのでございます。武士の意地づくから紀伊の國脊山の領主大判事清澄と、大和妹山の領主大宰の少貳國人の後室が、國境の吉野川を境としまして互に反目軋轢を續けて居りましたが、清澄の息久我之助清船は、何時しか國人の遺子の雛鳥と戀愛關係を結ぶに至ります。

然るに當時國政を左右致して居りました蘇我の入鹿は、自が權勢を頼んで雛鳥を後宮に迎へやうとしまして、其の手段と致しまして清船に難題を云ひかけて、遂に自滅させて了ふのでございます。然し清船の眞心を忘れぬ雛鳥は、あくまでも入内を拒んで清船に操を立て通し、母の手にかかつてあたら蕾の花の身を散らして了ふのでございます。

歌舞伎劇と致しましては、同年大阪の小川座に上演されましたのが最

雛鳥。竹本錣太夫

豐澤新左衞門

人形

娘雛鳥　桐竹紋十郎

こし元小菊　吉田光之助

こし元桔梗　吉田文作

久我之助清船　桐竹政龜

後室定香　吉田文五郎

大判事清澄　吉田榮三

初のものでございますが、江戸の舞臺にかかりましたのは、安永七年春市村座上演のものが、始めてのものでございます。

其時の重なる役々は、後室定香、お三輪、藤の方（山下金作）曾我蝦夷、漁師鱸七（助五郎）入鹿大臣、大判事清澄（團藏）久我之助清船、獵師芝六（宗十郎）雛鳥（いろは）で、此の時はお三輪の道行は未だ竹本でございましたが、天保　年十月河原崎座に於きまして、「願統緣芽環」の名題で、常磐津小文字竹夫の連中の語りましたのが、今日行はれて居ります常磐津の妹脊山道行の始めなのでございます。

◇床本

〈往古の、神代の昔山路の、國は都の始にて、妹背の始め山々の中を流るゝ吉野川、塵も芥も花の山、げに世に遊ぶ歌人の、言の葉草の捨所、妹山は、太宰の少貳國人の領地にて、川へ見越の下館背山の方は大判事清澄の領内子息清船日外より、爰に勘氣の山住居、伴ふ物は巢立鳥、谺と我と只二つ、經驗は鳥の音も澄みて、心細くも哀なり。頃は彌生の初つ方此下の亭には雛鳥の、氣を慰めの雛祭り、桃の節句の供物、萩の强飲侍女の、小菊、桔梗が配膳の、腰もすうはり春風に、柳の楊枝端

近く喃小菊、平常のお雛は、御殿でお祭なさるれど、姫様のおしつらひで、此山岸の假座敷、谷川を見晴し、櫻の見飽き、雛様も一入お氣が晴れて可からうの、此方も追付け好い殿御を、もつたら常住あの様に引付いてゐたら嬉しかろフウ桔梗の何いやるやら、何程女夫並んでゐても、あの様に行儀に畏つて斗りゐて、手を握る事さへならぬ、窮屈な契は厭や、肝心の寢る時は、離れ〳〵の箱の中、思の斷える間はあるまいと仇口とも雛鳥の、胸にあたりの人目堰く辛い戀路の其中に、親と親とは昔より、御中不和の關となり、逢ふ事さへも片絲の、結ほれ解けぬ我ひ、戀し床しい清船様、此山の彼方にて、聞いたを便り母様へ、お願ひ申して此假屋、お顔が見たさの出養生、爰迄は來れども、山と山とが領分の、境の川に隔てられ、物云交す事さへも、ならぬ我身の儘ならぬ、今は却々思ひの種いつそ隔てゝ戀ひ佗びる、逢れぬ昔が勝ぞかしと、切なる思ひ搔くどき、歎けど俱に侍女共、お道理でござります、ほんにひよんな情事で、隣同士の紀の國大和、御領分の競合で、お二人の親御様は摺れ〳〵、雛鳥様と久我様の、妹背の中を引分くる、妹山背山、船も筏も御法度で、唯た此川一ッ、つい渡られさうなもの、小菊瀬踏して見やらぬか、ヲ、滅相な、此谷川の逆落し、紀州沛へ一ときに、流れて往たら鮫の餌食したが、申し雛鳥様、お前の病氣をお案じなされ、此假屋の出養生さしなさつたは、餘所乍ら久我様にお前を逢す、後室様の粋なお捌き、女夫にして下さりませと直にお願ひ遊ばしたら、よもや厭とは岩橋の、渡る事こそならずとも切て遠目にお姿を、と障子ぐわらりを縁端に覗き溢るゝ侍女元、久我の助はつ〳〵と、又の行末身の上を、守らせ給へと心中に、念縮觀音の經机、案じ入つたる顔形、手にとるやうに、喃あれあれ、机に凭れて久我様の、物思はしいお顔持、お

癪かな發りつらん。エヽお傍へ行きたい、コレ爰にゐるわいなと、いへど招けど谷川の、漲る音に紛れてや、聞えぬ辛さ、エヽ辛氣、此方が思ふやうにもない、コレこつちや向いて見たが可い、と焦燥るお傍に氣の付々、ほんに夫よ、口ではいはれぬ心の丈、豫て認め奥山の　鹿の卷筆封じ文、戀し小石に縛りそへ、女の念に通ぜよと祈願を籠めてうつ礫、からりと川に落ち瀧津、波にせかれて流れゆく。エヽ、どんな、心の念は屆いても、女の力の屆かねば、思ふた斗り片便り、返事を松浦佐用姫の石になりともなりたいと、ひれふす山の刻もなき、久我之介川に目を着け、何處よりか水中に、打つたる石は重けれど、逆捲く水の勢に、沈みもやらず流るゝは、ムヽ重き君も、入鹿といふ逆臣の、水の勢には敵對難き時世の習ひ、夫を知つて暫しの中、敵に從ふ父大判事殿の心、善か惡かを三つ柏水に沈めば願叶はず、浮む時は願成就吉野を、假の御祓川、大神宮へ朝拜せんと、柏の若葉摘取つて谷を傳ひに水の面、見遣る女中が申し〳〵、今の小石が屆いたか、久我樣が川へ下なさるゝあの岩角の折曲りが、川巾がいつち狹い、幸の好い逢瀨と、いふに嬉しき雛鳥の、飛立つ許り振袖も、裾もほろ〳〵坂道を、折柄風に散る花の、櫻が中の立姿、しどけ、難處も厭ひなく喃う久我樣か懷かしやといふに、思はず清船も、雛鳥無事でと顔と顔、見合す斗り遠き間の、心斗が抱合ひ、詮方涙先だてり、申し清船樣、わしやお前に逢たさに、病氣と云立て、爰迄は來てゐれど、親の許さぬ中垣に、忍んで通ふ事叶はず、女雛男雛も年に一度は七夕の、逢瀨はあるに此やうに、お顔見ながら添ふ事の、ならぬは何の報ぞや、妹背の山の中を隔つる、吉野の川に鵲の、橋はないかと口說言、聞く清船も揖あらば、早渡りたき床しさを、胸に包みて、道理〳〵、我も心は飛立てど、此川の法度嚴しきは、

親との不和斗りでなく、今入鹿世をとつて、君臣上下心々、隣國近邊と雖も、親みあらば徒黨の企あらんかと、互に通路を警めて、船を泊たる此川は、領分を分ける關所と同然、命だにあるならば、又逢ふ事もあるべきぞ、今流したる水の柏、波に揉れて浮みしは、心の願ひ叶ふ報せ、入鹿が掟厳しければ、我も世上を憚りて、此山奥の隱れ住、心の儘に鶯の、聲は聞けども籠鳥の、雲井を慕ふ身の上を、思遣れよ雛鳥と、儘ならぬ世を怨み泣、喃、又遇ふ事もあらうとは、別るゝ時の捨詞、假令未來の父様に、御勘當受けるとも、わしやお前の女房じや。迚も叶はぬ浮世なら、法度を破つて此川の早瀬の波も厭ふまじ、何處如何なる力へなと、連れて退いて下さんせ、私は其處へ行きますと既に飛込む川岸に、慌て驚き留むる侍女イヤ〳〵放しやと泣入る娘、ヤレ短慮なり雛鳥、山川の此一瀬、水練を得たる者だに渡り難き此難所忽ち命を失ふのみか、母後室に歎きを懸け、我にも愈憎悪が懸る科を重ねる道理、必ず逸り召れなと、制する詞一筋に、思詰たる女氣も、今更弱る折こそあれ、大判事清澄様御入なりへと、報する聲はつと驚き久我之介、歸るを名殘押留むるも、我身を我身の儘ならず、コレ喃待つての聲斗り、後室様お出と、告ぐる下部に詮方も、泣く〳〵庵のうち悄れ、登る坂さへ別路は、力難所をゆく心地、空には知れぬ花曇り、花を歩めど武士の、心の嶮岨刀して、削るが如き物思ひ逢瀬の中を裂く川邊ひに大判事清澄、此方の岸より太宰の後室、さだかに夫と道分の、石と意地とを向ひ合ふ、川を隔てゝ大判事様、お役目御苦勞に存じますと、聲裲襠もかい取の、夫の魂放さぬ式禮、清澄も一揖し、早かりし定香殿、御前を下るも一時、參る所も同一なれども、此背山は身共か領分、妹山は其元の御支配川向の喧嘩とやら、睨合ふて日を遂る此年月、心解けるか解けぬか

は、今日の役目の落去次第、二ツ一ッの勅命、狼狽へた捌召るなと眼背ぐしやつく茨道　受合ふては歸り乍ら、身腹は分けても心は別々、若あいと申さぬ時は、マアお前には何麼せうと思し召す、知れた事御前で承つた通り首打放す分の事さ不所存な怖れは、有つて益なく、無うて事缺けず身の中の腐りは、殺いで捨てるが後の養生、畢竟親の、子のと名をつけるは、人間の私、天地から見る時は、同じ世界に湧いた虫、別に不憫とは存じ申さぬ。ハテ強い念ひ斷り、私は又いかう了簡が違ひます。女子の未練な心からば、我子が可愛うてなりませぬ、其代りに、お前の御子息の事は眞實何とも存じませぬ、只大切なは此方の娘、忝い入鹿樣のお聲の掛つた身の幸假令、どう申さうとも、母が勸めて入内させ、お后樣と多くの人に、敬ひ侍かさうと思へば　此樣な嬉しい事はござりませぬ、……ホ、……と空笑ひ、ムヽして又得心せぬ時は、ハテ、そりや最う是非に及ばぬ、枝振悪い櫻木は、伐つて接木を致さねば、大宰が立ませぬ、ヲヽ爾うなふては叶ふまい此方の怖とても、得心すれば身の出世、榮華を咲かす此一枝、河へ流すか報せの返答、盛ながらに流るゝは吉左右、花を散して、枝斗り流るゝならば、怖が絶命と思はれよ、いかにも此方も此の一枝、娘の命活花を、散さぬやうに致しませう、ヲヽサ、今一時が互の瀬越し、此國境は生死の境、返答の善悪に依つて、遺恨を重ねるか、さあ是迄の意趣を流して、中吉の野川と落合ふか、先それ迄は双方の領分、お捌を待つて居りますと、詞峙つ親と親、山と大和路別れても、戀らぬ紀の路恩愛の、胸は霧に埋れし、庵の内に別入る、立派にいひは放しても、定かにしらぬ子の心、鬱束なくも呼子鳥、娘々と谷の戸に、訪ふ初音雛鳥も、母の機嫌を差足に、母樣ようぞ、今日はお目出たう存じますと、武家の行儀の三つ指に、堅い程猶親

子の親み、ヲヽ能う飾が出來ました。今日は和女の顔持も可ささうで、一入目出度い母も祝ふて献上の此の花供へてたも、幾歳になつても、雛祭りは嬉しいもの、女子共何なりと、娘が氣に合ふ遊びをして、隨分といさめてくれと、何時に勝れし後室の、機嫌は訴證のよい出機、今のをちやつと乘出して、御覽じませと、侍女に、腰押れても兎やかうと、いひそゝくれのもつれ髪、イヤ喃雛鳥、脊丈延びた娘を、親の傍に引付けて置くは病の種、夫で急に思案を極め、和女によい殿御を持す、嫁入さすが嬉しいか、エヽ、ハテ氣遣しやんな、可愛い娘の一生を任す夫、和女の氣に入らぬ男を　何の母が持さうぞ、ナア侍女ども、ハイハイ、左樣でござります、お氣の通つた後室樣、嫁入の先は大方今のナ、焦るゝ君でござりませうと、押し推い當處も得手勝手、誰にか緣を組紐に、胸に眞紅のふきかゝる箱、取出し、妹背を並ぶる雛の日は、嫁入の吉日、此箱の主は極る殿御、雛の御前で夫定め、コレ和女の夫といふは、誰あらう入鹿大臣樣じやわいの、エヽ爾んな私を嫁入さすとは、ヲヽ大宰の少貳が娘雛鳥、美人の聞え叡聞に達し入內させよと有難い勅諚、エヽイはつと惚り、うろ〳〵と言葉は涙ぐむ許り、ヲヽ膽が潰れる筈、夫と申すも畏多い一天の君を聟にとる家の面目、日本國に此上のない嫁入の隨一、果報な娘、此嫁な目出たい事があるものか　ナア女子共、ハイ〳〵お目出たいと申さうか、いつそ亂驕ぎでござりますと工合違ひの嫁入に、菊も桔梗も投首の、二人は小腹立つてゆく母の心も色々に咲分の枝差出し、親が許さぬ云交し、淫奔は呵つて返らず、一旦思初めた男、何時迄も立通すが女の操、破りやとはいはぬが、貞女の立樣がありそうなもの、篤りと能く思案しや、此花は八重一重、互の不和なる親々の心揃はぬ二ツの花、一ツ枝、取結び、切放すに離されぬ惡緣の仇花

今和女の心次第で、當時入鹿大臣の深風に吹散され、久我之助は腹切ねばならぬぞや、雛鳥と緣切つて、入鹿樣へ降參すれば、淸船も命を助る、報せは川へ流す櫻、散るか散らぬは身の納り、時に從ふ風に靡き、君が手活の花になれば、八重も一重も恙なう、九重の内に侍る、互の幸、戀しと思ふ久我之助、助けると殺さうと、今の返事の誰一つ、貞女立樣サアサア見たいと、戀も情も辨へて、義理の柵堰止めて、涙せき上げ乍ら、母樣段々聞分ました、お言葉は背きませぬ、爾なら得心し入內してたもるか、アイ〳〵、ヲヽ嬉しや出來しやつた〳〵、夫でこそ貞女なれ、馴れぬ雲井の宮仕へ武家の娘と笑れな、今日より內裏上臈の、髮も改めすべらかし、祝ふて母か結直して遣ましよを、いそ〳〵立ちは立ち乍ら、娘の心思遣り、別れも櫛の果敢なきも、解ほどかれぬ憂き思ひ重き背山の庵の內、父の前に謹んで、久我之助の心底聞し召分けられ、切腹の赦免下さるゝ事、身にとつて如何許り、大慶至極と、手を支げば、默然たる大判事、やゝ打濕む目を開き、今朝入鹿大臣、此大判事を召出し、先帝寵愛の采女、身を投げ死んだりとは僞り、其方が悴久我之助、人知れぬ方へ落し遣りしに極れば、必定汝等が方に隱匿あるべしとの難題、元より知らぬ大判事、よく〳〵思へば、采女の御難を避けん爲、猿澤の池に入水の體にもてなして、密に落し參らせしは、中々久我之助が智惠でない、鎌足公の指圖をうけての計らひと知つた、身も令日が始、親にも隱し包みては、大事を洩さぬ心の金打、若輩者には神妙の爲方、ハア出來したりと思ふにつけ、邪智深き入鹿、久我之助が降參せ、命を助けん連來れと、情の言葉は釣寄せて、拷問に懸けん謀計、責殺さるゝ苦みより、切腹さすれ、采女の詮議の根を斷つ大功、天下の主の御爲には、何悴の一人など、葬に生へる草一本、引拔くより些

細な事と涙一滴零さぬは武士の面子の可愛うないものが、凡そ情ある者にあらうか、餘り健氣な子に恥ぢて、親が分錯してくれる侍の綺羅を飾り、嚴しく横へし大小悴が首を切る刀とは、五十年來知らざりしと、老の悔みに清船も、親の慈悲心難有涙命二つあるならば、君には死んで忠義をたて、父には生て養育の、御恩を送り申さんに、今生の殘念これ一つと、顏を見上げ見下して、わつと平伏す親子の誠、此方の亭には母後室サア〳〵目出たい、和女の名は雛鳥を、其儘の内裏雛、裝束の着樣も、此女雛と見合せて、サアサア早うとありければ、怨めしげに打守り、女夫一つは何時迄も、添遂げるこそ雛の德、思ふお人に引離され何樂みの、女御后、茨の衣の十二一重、雛の姿も怨めしと、取つて打付け緣板にころりと、落ちし女雛の首、驚く母の胸板に、必ず死と極る娘の命、包めどせきくるはら〳〵涙娘入内さすといふたは僞り。此樣に首斬つて渡すのじやわいのう、エエ爾ならほんに〳〵て貞女を立さして下さりますか、エ、忝い有難いと、伏拜む手を取つて喃入内せずに死するのを、それ程嬉しがる、娘の心しらいでならうか、あいと受けても自害して、死ぬる覺悟は知り乍ら和女の死ぬる事聞いたら、思合ふた久我之助、俱に自害召れうもしれぬ、切て一人は助けたさ、一旦得心したにして、母が手づから解いた髮は、下髮じやない、成敗の搔上髮、介錯の支度じやわいの、高いも低いも姫御前の、夫といふは唯た一人穢はしい玉の輿、何の母も嬉しかろ、祝言こそせぬ、斗りは久我之助が、宿の夫と思ふて死にや、是程に思ふ間、一日半時添はしもせず、褰の河原へ遣るわいのと、引寄せ〳〵雛鳥も膝に取着き抱着き、忝さと嬉しさと、逢は別るる名殘の涙、一つに落つる三つ瀨川、川を隔てゝ清船が、最後の觀念わるびれず、燒双直なる魂の、九寸五分取直し

腹にぐつと突立つる、ヤレ暫く引廻すな、覺悟の切腹急く事はないコリヤ冥土の血脈、讀さしの無量品、親が讀誦する間、一生の名殘女が面、一目見て何故死なぬ、ィヤ存じもよらぬ、此期に及んで、左程狼狽へた未練な性根はござりませぬ、去乍ら、今端の際の御願私相果てしと聞かば、義理に繫がれ雛鳥も、倶に生害と申すべし、然ある時は、大宰の家も斷絶、暫くの間乍ら、切腹の義はお隱しなされ、降參承知致せし體、後室方へお報知あら、女も得心仕り、入内致せば彼が爲、不義の汚名は受たれども、是ぞ色に迷はぬ潔白ヲ、出來した、よく氣が注いた、年頃立て拔く武士の意地、不和の中程義理深し、命を捨つるは天下の爲、助くるは又家の爲、氣遣せずと最期を淸う、花は三芳野侍の手本になれと潔く、いへど心の亂れ咲、可惜櫻の若者を散す、惜さと不愍さと、小枝に濺ぐ血の涙落ちて波間に流れゆく、夫ともしらず喜ぶ雛鳥、アレ〳〵花か流るゝは、嬉しや久我様のお身に惡ないしるし、私は冥土へ參じます。千年も萬年も、御無事で長生遊ばして、未來で添ふて下さんせと、心でいふが暇乞ひ、思ひ置く事云ひ置く事最う何にもござんせぬ、片時も早うサァ母様斬つて〳〵と受たれども、是ぞ色に迷はぬ潔白身を惜まぬ、我子の覺悟に闕されぬ、嬉しや、是ぞ雛鳥が入内の報知、久我之助が心の安堵、采女の方の御所在は、最前申し上ぐる通り、此世に心殘りなし、御苦勞乍ら御介錯、サァ〳〵母様斬つていの、未練にござんす母様と、泣かぬ顏する可憐しさ、刀持つ手も大盤石思は同じ大判事、子よりも親の四苦八苦、命も散り〴〵、日もちり〴〵、ハァ爾うじや、はや西に入る日輪は、娘がお迎ひ彌陀の來迎西方淨土へ導き給へ、南無阿彌陀佛と目を閉ぢて、念ひ斬つたる首胸を定めて取上ぐれど、刀は鞘に錆付く如く、離れ兼たる血筋の羈今斬殺す雛鳥を、無事と報する返事の櫻、同じく川に浮ぶれば、ァ

諸共、わつと泣く聲應ゆる反響、膽に徹して大判事、刀からりと落ちたる障子、ヤア雛鳥が首討つたか、久我殿は腹切つてか、ハア死なしたりと撞うと座し、悔むも泣くも一時に、呆れて言葉もなかりしが、良あつて定香聲をあげ、入鹿大臣へ差上たる雛鳥が首、御檢使受取下されと、呼はる聲を吹送る、風の案内に大判事、歎きの姿改めて　衣紋繕ろひ徐々と、下立つ河邊の柳腰、娘の首を搔抱き、大判事様、別て何にも申しませぬ御子息の御命は何卒と思ふた効もない、敢ない有様、お前様のお心も、推量致して居りまする。添ふに添れぬ惡緣を、思合ふたが互の因果、此方の娘もそひたい〳〵と思ひしに、餘り不憫に存じます。切めて久我之助殿の息のある中に此の首を其方へ渡し申すが、娘を嫁入さす心、實に尤も、嫁は大和聟は紀の國、妹背の山の中に落つる、吉野の川の水盃、櫻の林の大島臺、目出たう祝言さしませうわい、爾なら是迄の心も解けて、ハテ互ひのあひやけ同士、エ、忝ないと悅ぶも後の祭、ほんに脊丈の延びたる者を、何時迄も、子供の樣に思ふて暮すは親の例ひ、甘やかした雛の道具、一人子を殺して何にせう、跡におく程涙の種、侍女共其一式、殘らず川へ流れ灌頂未來へ送る嫁入道具、行器、長持犬張子、小袖箪笥の幾棹も、命存らへおるならば、一世一度の贈物、五町七町續く程、美々しうせんと樂みに、思ふた事は引換へて、水になつたる水葬禮、大名の子の嫁入に、乘物さへも中々に、形見も仇の爪琴に、首取載する弘誓の船彼方の岸より彼岸に、流るゝ血汐清船が、今端の顏容見る親の、口に祝言心の唱名、千秋萬歲の千箱の玉の緒も、切れて今は敢なき此死顏、生きてゐる中此樣に、聟よ嫁よといふならば、如何許り悅ばんに領分の遺恨より、意地に意地を立通す、其上重る入鹿の疑ひ仲直るにも直られぬ、義理になつたが二人の不運、あれ程思詰めた

嫁、何の入鹿に從はうとても、死ねばたらぬ子供、一時に殺したは、未來で早う添してやりたさ、云合さねど後室にも、是まで不和の大判事をあひやけと、思し召せばこそ、悴に立て一人の娘ヲ、よくぞお手に掛られし、過分に存ずる定香殿、ヲ、勿體ない、其お禮は彼方こちら、不束な娘故、大事のお子を御切腹、器量筋目も勝れた殿御、夫に持つは果報者とは云乍らあれ程迄、手汐に掛けて育てた子を、又手に掛けて斬る心、推量致して、を武士の覺悟は常乍ら、緩急の時は取亂し、介錯爲遲れ面目ない、イヤ〳〵夫で目出たい此祝言、是がほんのさし嫁入、一代一度の祝言に、聟殿の無紋の裃、首斗りの嫁御寮に、對面せうとは知なんだ、夫も子供が遁れぬ壽命兎にも角にも世の中の、子といふ文字に死の聲の、あるも定まる宿業と、隔つる心、親々の、積る思ひの山々は、解けて流れて、吉野川、いとゞ漲る斗りなり、涙拂ふて大判事、首掻上げ、聲高く、悴清船承れ、人間最期の一念によつて、輪廻の情を引くとかや、忠義に死ぬる汝が魂魄、君父の影身に附添ふて、朝敵退治の勝戰を、草葉の蔭より見物せよ、今雛鳥と改めて、親が許して盡未來、五百生まで變らぬ夫婦、忠臣貞女の操をたて、死んだる者と高聲に、閻魔の廳を名乘つて通れ、南無成佛得脫と、唱ふる聲の聞えてや、物得いはねど行す手を、合せ兼たる此世の別れ、はや日も暮れて人顏もみえず、庵の霧隱れ、埋む娘の亡骸は、此方の山に留れど、首は背山に檢使の役目、我子の介錯、涙の雛、よしや世の中變き事は、何時か當麻の、大和路や、後に妹山、先だつ背山、恩愛義理を堰下す、涙の川瀨、三吉野の、花を見捨てゝ出でてゆく。

赤阪並木より古寺の段

彌次兵衛　●豐竹つばめ太夫
喜太八　竹本鏡太夫
和尚　竹本相生太夫
親父　竹本播路太夫
伴千松　豐竹好太夫
豐澤仙糸

東海道膝栗毛

赤阪並木より古寺の段

此淨瑠璃は、一返舍一九が代表作で初篇が出ましたのは享保二年で、文化六年に其八篇が出て東海道の分が完成したのであります。道中膝栗毛が非常に評判がよかつたので、更に一九は續膝栗毛や續々膝栗毛の筆を取ることになつたのであります。丁度寳永年間から明和八年迄に流行つたお陸まゐりで東海道が賑つたことで、其旅の知識と趣味が極まつた潮先に乘じたので、好評を博したものと思はれます。一九が此趣向をどこから思ひついたかと申しますと、淺井了意の東海道名所記からとも云ひ、或は寳暦頃の或册子に倣つたとも云ひ、酒井抱一の弟忠輔の書いたものを土臺にしたとも、色々の說がございます。此淨瑠璃の作者は、年代も不詳で、膝栗毛の趣向其他を脚色したもので、三代目櫻田治助が安政元年七月中村座夏狂言二番目に、一九の原作を飜案して「旅雀舞妓話」の外題で上演した際に、その床は義太夫であつたから、或は其當時作曲されたものかも知れないと云はれてゐます。これが膝栗毛が上演されました最初で、其後も赤坂並木から古寺までは、度々演じられてゐますが、他の部分は一向に出ないやうであります。今日ではこの淨瑠璃を全然取つた魯中の作曲になり新内節の方が有名で、流行してゐまして

豐澤廣助　鶴澤清二郎　豐澤團伊三　野澤吉男

義太夫の方はまづ珍らしい語物の部になつてゐます。

◇床本

人形

彌次郎兵衛　吉田榮三
喜太八　吉田文五郎
親父　吉田玉松
伴千松　桐竹紋司
古寺の和尚　吉田小兵吉

〽いでや此春の景色の麗に、おふさくるさの稀人も袖ふりかはへて面白や、是は關の東に住む喜太八、彌次郎兵衛と申者にて候、扨も此度都方を一見せばやと思ひ立て候、殊更けふも早日くれて、道を急ぎ候、程に宿を取らばやと存じ候。

東路をいつしか後に三河路や、あた一河も打ち過ぎて、歩むに馴ぬ旅づかれ物岩穴の觀世音、御燈のかげもほのぐらき、御油の宿をも出放れて並木原にぞ着にける。

喜太八かたへに荷をやつとこさとおろし、アヽヤレ〳〵〳〵くたびれた〳〵此マア彌次樣は何をしているんだろ、アヽ早くくればよいにナア、後の茶店で聞けば　何でも此松原にはわるい狐が出るとの事だが、アヽくらさはくらし提灯はなし、何だかうそ氣味のわるい事だなア、此彌次樣はなぜ遲い、わらじが切れたか門止か、と後を見やりつ延上り　まつ毛をぬらす後よりも、彌次郎兵衛は喜太八がかねての臆病知つたれば、おどしてやらんと小隱れし　思ひ付たる狐の面　手拭のはし引結び顏へすつぽり、引かぶり、さし足拔足後よりワイ、アヽ申し〳〵御免なさ

りませ〳〵〳〵、わるい狐とは申しませぬ、よいおきつ様でござります。御免〳〵といふ聲ははの根も合ず膝がた〳〵、彌次郎兵衛俄に作り聲ヤイ〳〵〳〵、ヤヽラヤイノヤイ、ヘイ〳〵ヘイ〳〵〳〵のおへゝらヘイのヘイ〳〵〳〵儕憎い奴、けふもかごかき共に錢を一本ちやりめかし酒肴をおごりし事よもや、忘れはしをるまい、アヽ、申々お前樣は、よふごぞんじでござりますなア、ほんのそれはでき心慾氣ではござりませぬ、アヽイヤイヤ〳〵、ぬかすまい〳〵、まだ有る〳〵、鹽井川では故もなき座頭の肩におぶさつて川を渡りあまつさへ、座頭の買つた其酒を盜喰ふココナ横道者めが、アヽ、申々其かわり尻が割れて、酒代は皆わつちが拂やしたから、其勘定は濟でごせエやす。ぬかすまいまだ有〳〵日阪の泊りでは、信濃のみこのばゝアが所へ夜這にうせ、佛壇の中へすててこてんてこなとおつこちた。其騷ぎを儕が連の佛の樣な彌次郎兵衛にぬり付け、儕はぬく〳〵しらぬ顏、重々の不屆者めが、其かわりには是をくへと、傍に有り合ふ馬の糞枝につゝかけ差出せば、エヽ、其馬のふんを私に、チイノ、エヽいやか、じやと申して夫れがマア、喰ねば連行く、サアうせい、アヽ、申し〳〵〳〵、實は私のお袋が今わの枕元へ私を呼コレ喜太公やたとへどの樣な事が有つても馬のくそだけは喰てくれなとの遺言で御座りやす、どふぞ此儀は御了簡、ムヽ、然ば此以後汝が連の彌次郎兵衛が申す事何によらず背きはせぬか、ハイ〳〵〳〵何にも背きは致しませぬ、ムヽ、夫なれば此荷物を汝が荷物と一つにいたし、赤坂の泊りまでかついで行け、アヽ、サア早くかつげい、アイサア早く持て、何をうぢ〳〵するぞ、いやい行けといはゞ行かぬか、ハイ只今まいりますはいのと荷物取上げ、つく〴〵見てチヤ此荷物は私が連の彌次樣の荷物によふく似た樣なと、こは〳〵眺めるなりそぶり、ヤアおまへは彌次樣

じやないか、テモ扨もひどいめにあはしたのといへば彌次郎兵衞吹き出し、ハヽヽヽハヽヽべラ棒めいかに臆病じや迚餘りだ〳〵、ハヽヽハヽヽ、イヤモウ彌次さん餘りおめへの事ぢやねいが惡いしやれだぜ、只さへおつかねエと思ふて居る所に思ひがけなふワイと言はれて　イヤモウ〳〵〳〵あつたら肝をひやし物にしやした、ハヽヽ、喜太公〳〵、サア〳〵サア氣げんを直して早ふ赤坂へ居て泊ふ〳〵、そんならそふしよふ、サア是からは二人連だ、こはい事も何にもないぞ、ヤイ狐め出て見やがれ、エヽおいらァお江戸は神田八丁堀九尺二間の城廓かまへ十二文で汲す水戸の水でみがき上げた喜太八様とはおらがこつたい。たれだと思ふ、エ、つがもねエ、コレサ喜太公ごうきに力むじやねエか、そんなに力むと又今のワイ、アヽコレ〳〵〳〵御めんだ〳〵、エ、何のこはいと思やこはく、ないと思やどふしたと、猶おつかねエや、こんな所に長居はおそれ、サア〳〵行かふと、兩人が荷物を一荷にさしになひやんとこさどつこいしよ〳〵〳〵、坂はてる〳〵鈴鹿はくもる、エヽ喜太公てめへも何かやれよ、おれは今おどろかされて聲もなにもしやしねえそんな事云はずにやれよ笑つちやいやだよ、何笑ふもんかいそんなやろよ土山間の間の土山雨がふる、ハヽヽヽうんとこさどつこいしよ、アヽコウ彌次様〳〵アノ向ふの方に何だかコウ白い物がちら〳〵見えるはアリヤマァ何で有ふな、ムヽアレカ、アリヤらいとのちんちよふよナニ大黑様のちんちくりん、何をいつてやかるんだい、弔の提灯だ、エ、そんなら爰は墓所かエヽきびの惡るい何だかコウ首筋がぞつ〳〵とする様だ。

エヽコリヤ折りわるふ又雨じやいま〳〵しいと、つぶやき〳〵行先へ、ちよこ〳〵〳〵と小坊主が形にも似ざるばつてら笠、德利片手に歩みくる、それと見るより喜太八が、ソリヤこそ出たは、化物

じや、彌次さんゆだんせまいぞやと、ぶる〳〵ふるへば、彌次郎兵衛幸ひ有合ふ天秤棒、腕に任してぶちのめせば、アイタ〳〵〳〵アレ〳〵とゝやアイ、誰かひどいめにあはせるはヤイと、いふ聲聞き付けかけくる親仁、此體見るより恟りし、彌次が胸ぐらしつかと取り、此悴には仁とが有つてかはいそうにぶちのめした有様にサアぬかせ　聞かぬ〳〵とせちかへば、喜太八見るより、コリヤたまらぬ、ゆるせ〳〵と一さんに後をも見ずして木の根につまづいてひざぶしすりむいて赤い血を流してこすり〳〵逃て行く、ヤイ〳〵〳〵、ゴリヤ喜太八、おのれ一人を殘して置て逃るとは胴慾じや、エヘ、、是は〳〵おとつさんで御座りますか、エ、お前のお子様共存じませず、只化物じやと心得まして打ましたは大きな麁相、眞平御免下さりませ、イヤ聞かぬ〳〵、折角買にやつた五合の酒、雫も殘らずこぼして仕まい、ちいさい者をむごらしうひどいめに合はせたなと、ぐつと締れば、ア、申し〳〵マ、、、それでは咽の佛様がだいなしになります。ちよゆるめるめて〳〵下さりませ、五合のエ、酒がこぼれたとは、五合どうだん、お氣の毒に存じます、代は私が出しますから、一升のお願ひ、かん二升とおつしやつてくださりませ、きつとお禮に三升いたしますから、四升いはずと御了簡五升でござります、エ、しやれ所かい、ア、御腹立は御尤、疵養生代にはかうやく代を出しますから、どふぞ赦して下さりませ、ムゝ夫なれば赦してやらふ、サア金出せ、ハイいくら出しましよナ、ヲ、命がはりには安いけれど、十兩にまけてやる、エ、十兩、とんだ事おつしやります、十六文のかうやくを百買付けても一分であまる、どふぞ二歩にまけて下さりませ、イヤならねエ、二歩がならざ三歩、インヤそんなら四歩、エ、しぶといやつじや、ならぬ〳〵、夫じやおまへできない相談じや、いゝ値

じや高いちとまけねエ、ムゝそんなら十兩の内を一兩まけて九兩わい、エゝ十兩の内を一兩まけて九兩とは面白い、ハゝゝしかし間夫代でも七兩二歩はあたりまへぢや、エゝヤア知らざ半分値さ、どふぞ夫で御了簡とはどんなあたいムゝ五兩にまけいか、五兩なら安いものじやがまけてやるわ、サア金よこせ。エゝエゝサア金よこせエゝ現金かへ、知れた事じや、ハイ〳〵〳〵只今勘定いたします〳〵、エゝかふと、エゝ私が咽のいたいくるしみがゞあげて、四九八九と四九三六匁と八九七兩二歩と、五兩の金を差引して三兩と六匁。お前の方からおつりを下さりませ、エゝさま〴〵のたは言、モウ了簡がウヌならぬわい、エゝ又いや〳〵、又しまつた、アゝ申し金上げます〳〵、實は道中が物そふで御座りやすから、金は胴卷に入れて腹にまいてござります、おとつさんお前さん一寸手を貸ておくんなさい、ヲ、そふで有ろ〳〵、そんなら出してやろ、これか〳〵ホゝアゝそりやしらみ紐でござりますなんだきたないやうふだが、そんなら是かアゝクゝゝゝくすぐつたい〳〵、それやへそだ〳〵、何だへそだてめェのへそは、大きな出べそだな、アゝゝハゝゝ其下の方にきんが二兩包んでござります、それおまには、エゝいまいましいべラ棒めそんならいつそ此きんをと力に任せ引摑み、ぐつとしむれば、アイタ〳〵〳〵〳〵死るはい〳〵〳〵、ハアゝと計りにうんと其まゝいきはたへにけり、遺の親仁も恟りし、南無三死だは是幸ひと、彌次郎兵衞が帶ぐる〳〵と、すつぱり剝いだる丸裸、墓所の方よりとつかはと、經帷子に角帽子、手早く着せて、サアサア、これでちつと腹がいた、膏藥代のそのかはりと、着物荷物を引さらひ、千松よ來いと手を引いてあし早にこそ立歸る、次第に更ける夜嵐のぞつと身にしみ彌次郎兵衞、息吹かへし起上り、ヲゝ寒〳〵、こゝはてどこやしらんて

おれはマア一體どふしたのじや、エヽこふと、エヽマア御油の宿を放れて、狐のまねをしたはト、夫から小僧をぶつたはト喜太八は逃たはト、そこで咽喉を〆上げられたはト、夫から後はとんと夢中で何にも覺えがね、エんだが、コイツは夢か知らん？　でヲヽさむ〳〵イヤ〳〵、向ふに墓所が有るわい、して見りや夢ではないわい、ハテどふしたんだろと、撫廻し〳〵、ヤア〳〵〳〵おれが着ているは、コリヤコレ經帷子じやそふして褌にごましほか當てある。ヤア〳〵〳〵そんならおれは死だのか、ハア悲しや、扨はきんを〆上げられ、それで死だか、ハアヤア〳〵ア、淺ましい、心細い身に成つた。こんな事ならカヽアにもとつくりと暇乞して置ふ物、こんなに早ふ　ふとは知らなんだ〳〵、めいどの道は暗いと聞いたが、ほんにコリヤ眞くらがりだ、どふぞ極樂へ行たい物じやが、十萬億土とやら言が大抵では行かれぬやいア、心細い〳〵、斯なる事共露しらず、嘸や後にて女房がけふは御無事の便りも有るか、あすはつかひの人もやと日をかぞへ指を折り待ひかれたるかひもなふ死んだと言事聞たなら、嘸悲しかろ口おしかろ、逢たかつたで有らふのに、なぜ逢はしてエヽコレ下さんせぬぞいな、魂魄あの世に返るなら、最一度かゝあの顏見たや、夫迄もなく今こゝで、おれが死だら後篇に嘸や一九がこまるで有ろ、それも悲し、カヽアもかはゆし、心一つを二道にめいどの闇に迷ふとは何の因果ぞ情ない、どふぞ今一度生かへり、カヽアの顏が只一目みたいわいのと身をもだへ、すゝり上げたる水ばなと涙と涎一時に落て流るゝそつせ川、末に漲る風情なり、ハアヽ迷ふた〳〵、アノ鐘の音は慥にお寺極樂淨土の導引賴み、お十念でも授からふ、ヲヽそふじや〳〵と立上り〳〵鐘鳴方を知るべにてたどり行てぞはかなけれかくともしらず喜太八は漸遁れ、此寺へ一夜の情、丸寢して夢とな

く又現とも泣寢入つたる折こそ有はれよのはかなき物はかげらふのありやなく〳〵彌次郎兵衛死だと思ひつめたさを、こらへかねたる雨涙、火かげしるべに立よりてさも哀れげなるこはねにて、申し〳〵私は娑婆の者お願ひ有て參りました、どふぞお願ひ申ますと、いふ聲聞き付け、和尚は立出で、誰じや〳〵何用じやと、戸口の鏁表にも和尚様私は今すぐ死たてのほや〳〵亡者でござります、どふぞお願ひ申しますといふ聲、寢耳に目覺す喜太八、起ると明ける門の口、彌次郎兵衛が姿もくら紛れとらへる袖のふり合せ、和尚と心へ彌次郎兵衛を無理に引込み取りちがへ、戸口を内からぴつしやり引立て、ソリヤこそ亡者が來おつたぞ、和尚様必ず外へ出まいぞや戸口はおれが押へて居るァ、門に居るは、幽靈じやて、儕を入れてよいものか、といふもがた〳〵膝わな〳〵、寺のじしんでどうぶるひ、エ、何だかコウまつくらがりでは何にも分らぬ、火打ちいづくとくらがりを、さぐる手先に火打箱、がち〳〵ふるふ附木の光り、ヤァコリヤ和尚じやない幽靈じや〳〵、ァ、〳〵赦し賜へ〳〵〳〵と着物をあたまへすつぽり引かぶり正體さらになかりける、彌次は恨のふるひ聲、ノウ恨めしい喜太八め、儕おれがしめ殺されるを見捨て能くも逃おつたなァ、赦し賜へ〳〵イヤ〳〵〳〵恨の魂魄此世に殘り汝も冥途の道連れに、いざ連行て思ひしらさん、來れや喜太八サァこいと、付廻されて喜太八が氣も魂もきへ入る計り、ヤァ〳〵〳〵そんならお前は殺されて迷ふてきたか、ハァ悲しやそふとはしらず、今迄も此彌次さんはどふしてぞと、案じて後へ戻らふにも、何分こはくて一足も後へかへれぬ事かいのせふ事なしに此寺頼み泊てもらふた計りじや、是迄のよしみを思ひ恨をはらして浮んでたべ、南無阿彌陀佛〳〵〳〵南無妙法蓮華經〳〵おんあほきやべろしやのおまかほたらばにはんど

はぢんばらはらはりたや助け給へ天理王の命高間ヶ原に、イヤ〳〵修羅のくけんも其方故、只恨めしやひやめしやお茶のめしや麥飯やとろゝにならくへ連行くと、又立よれば身をちゞめ、アヽアレ人殺し助けてと　和尚様〳〵のふと呼ばりわめけば戸を蹴放し、和尚はかけ入り押し隔て、珠數さら〳〵と押しもんで、東方には五三一、南方にはぐんだり夜叉明王、西方でん〳〵九馬の三ば北方句道二は五六十、中央だんまりふとい明王五千有りや所詮ふけん泊れや〳〵浮めや浮めやと祈りける、胸に當りし彌次郎兵衛赦させ賜へ、アヽうくるしや我こそ東の都に住む彌次郎兵衛と言ふ者なり。御油の宿の泊りにはづれ、不慮の最期を遂げたりしが、日頃からの念佛ぎらい、冥途の闇路に方角知れず、何卒出家のお情にも彌陀の御國へお導引頼み上げます〳〵と、涙と鼻を横なでに恐れ〳〵て願ひける。和尚うなづき善哉〳〵、冥途の道の引導は差當たる愚僧が役去りながらふせない經は讀みがたし、地獄の沙汰も錢次第、布施物持參めされしかと、聞いて彌次郎兵衛あたまをかき、成程御尤路銀も少々有りたれど、御油の宿にてすつぱりはがれ、身はちやんぷらのすかんぴん、どうぞお慈悲に結縁にて、彌陀の御國へ御いんどうお授けなされて下さりませ、アイヤ〳〵近年世がらが悪ふて寺から里の力持、それ故けんきんかけねなし、錢なき衆生は助からず、七里けつぱいせかせ〳〵、ハァそれは何共ぜひがない。コレ〳〵喜太八聞く通りの此仕合、どうぞ貴様が持つてゐる路銀をおれにかしてたも、エヽめつそうな〳〵、此金かしてたまる物か、エヽとんだ事〳〵、ムヽそんならいやかエヽ恨めしや、アヽコレ〳〵貸すわいの〳〵と、肌に付けたる胴巻をぐる〳〵はづし　和尚の前さもおしさふに差出し、ハイ〳〵申し和尚様此金は私が命代りの金なれど、コウ見込まれたらしよことがない、

どうぞ是にて御引導授けてやつて下さりませ、ヲヽ善哉〳〵、去りながらコリャわづか二三兩、十萬億土の道なれば、宿々泊りのはたご代、きちにしてもたらぬ〳〵、其上三づの川の越錢、ばゝァの運上極樂の東門番への心付、四十九日や五十兩合せて日兩百ケ日の追善供養御茶湯代にもならぬ〳〵じや、と申してモウ夫切一文もござりませぬ。身に付いた物とては千手觀音様ばかり、ムヽそんならそこで裸になり、着物殘らずぬがつしやれ、エヽ夫じやお前寒ふてこられませぬわいの、ムヽそんなら死人はこんたの連れなれば、連れていんでもらひませふ、エヽめつそふな事おつしやりますはいな、然らばぬがつしやれじや、と申して是がマァそんならおれがおはれうか、アヽコレ〳〵とんだ事〳〵幽靈を負ふてどふ成る物か、そんならぬぐか、サア夫は、サァ〳〵〳〵エヽ、はまた情けない　ムァ何とせふぜひがない、アヽぬぎます〳〵〳〵、どふせふ〳〵に帶ぐる〳〵と、布子諸共引丸め差出しハィ仰に從ひ脫ぎましてござります、ヲヽ善哉〳〵、然らば導引致さんと、珠數取りあげて勿體らしく、汝元來しやれきのごとく、臨終正念ちや〳〵むちや〳〵、足は飛ぶに任せ歸るを知らず、こいつ元來江戸子にてぢんばら〳〵ばらはり込み、金銀財寶芥の如く遣ひなくし、女郎娘下女藝者後家尼人の女房まで、ちやらくらこんたん手くだきもつて、おんころ〳〵せんだりまきやァおんころ〳〵せんだく婆のふまくさんまんだのふだァさんせんだくじやこいつは一たいどうらくじやなむ三寶めつぼうかいむ中さん〴〵らつぴらんぐはい五十三次股にかけ、道中たつしやれ惡口喧嘩口論其くせ聞いた風めつたむせうつよい顏、お先まつくら大きに臆病。それ故丸裸やみくも言語同斷、何ぞいふと畜生呼はり、馬牛犬猫ちんあしたに道を聞いて、夕に死す共何ぞいとはん丸はだか、明朝さめ來つてすべ

て夢のごとく恐るべし〳〵、此行先はくもかぶり、行きたい所へつゝと行けと、衣裳路銀を引さらへ一間の内へ入るよと見えしが　和尚が　姿　忽にありし家居も一時に消て後なく明烏　只ぼうぜんと彌次郎兵衛、どふして玆へ喜太八も互に顔を見合せて、あきれ果たる馬鹿らしさ、アヽコレ〳〵彌次様、お前の形はソリや何と云ふ形ぢや、チャ〳〵〳〵、こりやどふしたんだろ、おいら夕死んだはづだが、カノ親仁めにすつぱとはがれて仕舞ふた、サアわしも坊主に皆取られ裸百貫一文なし、今の坊主めどこへいたの、やつぱりあいつも狐であらふ、大そふに化されたぜ、イヤコレ喜太八どうぞ仕様有るまいか、どうと言ふたら乞食なり外に思案はないな、アヽコリヤヤイそんな心細い事いふなやい、それだといふてどふなるものか、お前も裸おれも裸かうもあらうか、

狂言〳〵どふせうぞ何とおしやうにみなとられやう〳〵じゆばん一つ喜太八、とはどうだい、中々うまくやりやがつた、そんならおれも一つやつてやらふ、エヽこふつと。

〳〵ゆうべまでかさね着てゐた彌次郎兵衛けふかたびらになつたあはれさ、ハヤハヤ夜があけたにこんなざまでうろ〳〵してもいられまい、何かよい思ひ付きはあるめえか、ある〳〵コレこゝにほうきの古いのがある。是でおれが奴ふるからお前は其下駄の古いので拍子を打ちな、そふして成りとも行かふじやないか、イヤコイッは知恵だ面白い、そんなら喜太八ふりだせろとつかけべい、（行列）ハレワイサノサ、夕もさん〴〵化された　裸で道中がなるものか、成つてもならいでもしよことがない。ハイワイサノサノザコレワイサノサ馬鹿な癖入大鳥毛ヒン〳〵ドウ〳〵しやん〳〵〳〵、夢路を辿るこゝちにて膝栗毛迚世の人の笑ひの種と成りにけり。

歳末年始

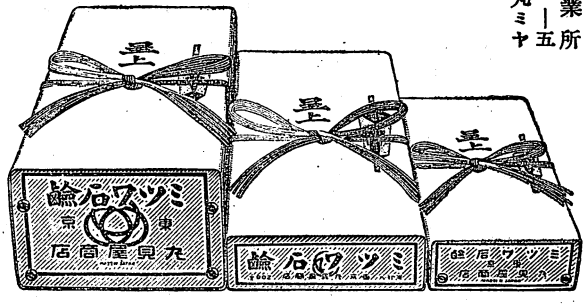
の御贈答品には
眞箇に價値のある

◎ミツワ石鹸

御贈答季節には毎度、御用命を賜はり
忝なく厚く御禮を申上ます。當年も亦
相變らず御註文の程を御願ひ申上ます
何處の取次店でも特に勉強して販して居りますが
萬一御近所で賣切等の節は本舗へ御一報を願ひます

三箇函入・半打函入・一打ら函入の三種がございますから御贈答用としては如何やうにも御意の額に成ります

本舗 東京 ◎ 丸見屋商店
下谷區二長町營業所
電話下谷(83)二一〇一—五
振替東京七一〇 電略丸ミヤ



（德用大形三箇函入包・半打函入包・一打函入包縮寫圖）

第三回化學工業博覽會最高名譽賞受領

一家に一個

歯を健かに口中を爽かにする

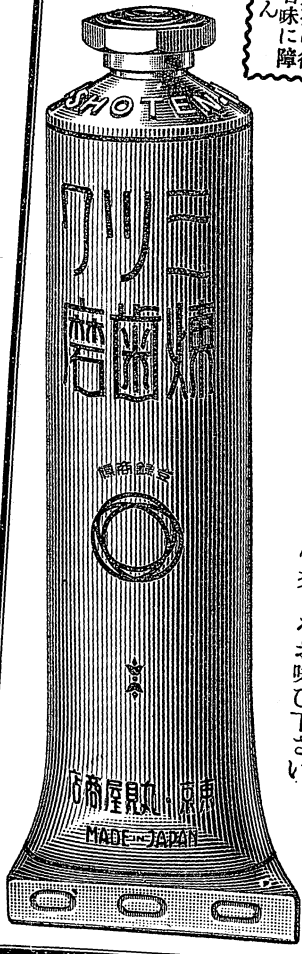
ミツワ・煉齒磨

脂臭く無く、苦味無く、味良く匂が快いから使用後すぐと玉露の茶を飲んでも、些しも其茶の微妙な香味に障りません

歯と口の健康第一

ミツワ煉齒磨は、歯を清らかにし、歯齦を歛め、口中の靡爛を防き、口腔の防腐、消毒、及び制酸の效力を有し、齲齒の豫防に效があります。

◇舶來品と比較御試用の上その優秀さをお味ひ下さい



ミツワ石鹸本舗　東京　丸見屋商店

徳用大形（七十瓦）入　一箇　金二十錢

携帶用中形チューブ入　一箇　金十錢

昭和六年十一月二十五日　印　刷
昭和六年十一月二十七日　發　行

東京市本郷區駒込富士前町四十三番地
編輯兼發行人　藤　田　篤

東京市小石川區久堅町百八番地
印　刷　者　東　興　亮

東京市小石川區久堅町百八番地
印　刷　所　共同印刷株式會社

本邦唯一　處方明記

ミツワ家庭藥

みつわ・かていやく

効力最も確實なる藥三十二方を揃ふ

理學博士　藥學士　小平　勳氏監督製劑

製劑監督　理學博士藥學士　小平勳氏

劃時代的の

一、處方を明記して内容を公開す
一、處方的確にして奏效確實なり
一、製劑精確にして效力一定不變なり
一、藥品純良にして中毒の危險無し
一、容器完全にして變質の處無し
一、内服藥は錠劑にして服用し易し
一、價格低廉にして長く保存に耐ふ

家庭藥です

説明小冊子御申越次第送呈

全國の藥舗にあり　◎ミツワ家庭藥の種類　若し無き時は御注文

ミツワ健胃錠	ミツワプレトロピン	
ミツワ胃腸散	ミツワリンゼーン	
ミツワ消化錠	ミツワ點眼液	
ミツワ制酸錠	ミツワ鼻病液	
ミツワ緩下錠	ミツワ齒痛液	
ミツワ止瀉錠	ミツワ含嗽錠	
ミツワ清腸錠	ミツワ鎮痛藥	
ミツワ驅蟲錠	ミツワ發毒液	
ミツワ清涼劑	ミツワ養毛液	
ミツワ解熱錠	ミツワ腐臭藥	
ミツワ鎮咳錠	ミツワ撒布藥	
ミツワユース	ミツワ軟膏	
ミツワ人參錠	ミツワ制痒膏	
ミツワ婦人湯藥	ミツワ頑癬膏	
ミツワ婦人坐藥	ミツワ痔坐藥	
ミツワ産婦藥	ミツワ膏の下	

◎ミツワ石鹼本舗　東京　丸見屋商店

ミツワ各種製品にして萬一御近所の取次店に品切れ等の節は電話(下谷(83)三〇番・一七〇一番より一一〇五番まで)か藥書にて本舗へ御注文次第假令一瓶一箇にても市内は早速配達御供給申上ます。

彦山權現誓助討 二
艶容女舞衣
妹脊山婦女庭訓 二
東海道膝栗毛 二

◎ミツワ石鹸
サーワ白粉

含鉛白粉と同樣に
ツキよくノビよき
純無鉛白粉

定價金拾五錢